

始



325

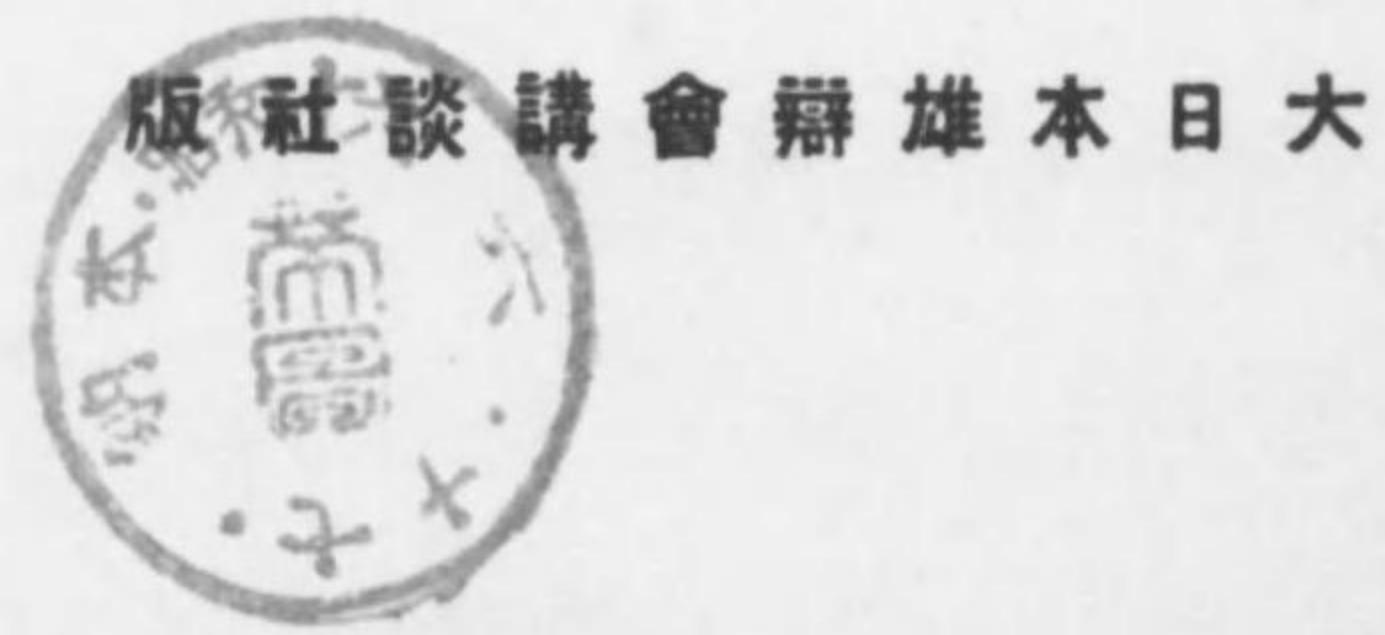
F13
U-57
2



いんたな土産



氏原大作著



『いくさ土産』のはじめに

戦争から歸つて來ると、待ちかまへてゐた子供たちが並んで、

「お父さん、お土産。」

と、太郎が手を出す。

「僕には金鷄勳章。」

と、次郎が手を出す。

三郎は、まだ幼くて一人前の口がきけないから、

「僕にはチナの星。」

と、支那をチナと言つて手を出す。

お父さんは困る。旅行してゐたのではないから、子供たちへ土産を買つてゐない。たとひ買つて來てゐても、金鷄勳章や支那の星をくれには困るのである。金鷄勳章の方はまだ

よいとして、支那の星になると何のことか意味もわからない。

お父さんが困る顔を見て、お母さんはこゝろ笑ふ。お母さんにはその意味がわかるかをかかしい。それは、お父さんの出征後に生まれた三郎がむづかつて泣く時、お母さんは、自分で作つた歌をうたつた。

日の丸たてて勇ましく

支那へ行かれた父さまの

いくさ土産に何もろた

金鷄勳章に支那の星。

坊も大きくなつたなら

日の丸たてて支那へ行く

手柄なされた父さまに

さてもよく似たてつかぶと。

昔の子供は、ねん／＼ようねん／＼ようで眠つたが、今の子供はたゞのねん／＼ようでは眠らない。三郎は、お母さんの歌を聞いて眠り、太郎と次郎は、「お母さん、僕もよ、僕もよ。」と、お母さんにぶらさがつた。三郎だけではない。僕たちも支那へ行くといふのである。かうしてどの子も育つた。

その話を聞いて、お父さんは前よりひどく困る。ほしいと言つても、そんなものはもつてゐない。支那の星が無理なことは誰でもわかるが、金鷄勳章の方は絶対にもらへぬわけのものではない。それをお父さんはもつてゐない。それだからお父さんは困るのである。

「あれとあれはいけない。他に何かないか。他のものなら何でもあげる。」

「他のものはちつともほしくないよ。」

「ほしくないでは困る。何かあるだらう。お父さんは、話ならいくらでも知つてゐるのだ

がね。』

『むかし〜はいやだよ。』

『おちいさんとおばあさんは、何べんもきいたよ。』

『それならいくさの話はどうだ。』

『いくさの話ならよい。ね、次郎。』

『すてき〜。僕、それにきめた。』

三郎も手を叩いて、

『すてき〜。』

と、はしやく。

お父さんは考へる。お母さんが歌つて聞かせたやうに、この子供たちが大きくなつたら、日の丸をたてて支那へ行つてもらはねばならぬ。支那ばかりでなく、南の海の方へも行つてもらはねばならぬ。その頃にはもう戦争はすんでゐるだらうから、三人が三人とも兵隊になつて行かなくてもよい。しかしどの子もみんな立派に成長して、銃をとつても、

鍬を握つても、槌を振つても、すべて日本人らしくやつてもらひたいのである。お父さんはさう考へつゝ話を聞かせた。この話が、金鷄勳章をもつてかへれなかつたお父さんの、子供たちに對するたゞ一つの土産なのである。

お父さんの話はあまり面白くない、が、どの話にも日本人の血が通つてゐる。それだから、この話を聞いて育つた三人の子供は、立派な日本國民となつて、お父さんたち兵隊のあとをつぎ、その代にはやりとげられなかつた仕事を、完全に仕上げてくれると、お父さんは信じる。

これはたゞ三人の子供だけではない。お父さんは、この話を集めたこの書物を読むすべての子供が、三人の子供と同じになつてくれると信じる。又、お國のために祈るのである。

昭和十六年六月

氏原大作 しるす

目次

らつきようの山……………二
母の軍刀……………七
鳩と兵隊……………四
ルルーの首環……………七
内地の風……………七
親子の軍馬……………一五
興亞の晴衣……………三

金鷄勳章と徳利……………一八
本溪湖危し……………二〇
前夜の合唱……………三四

装幀挿繪 吉田貫三郎



土^み
産^{やげ}

氏^{うぢ}
原^{はら}
大^{だい}
作^{さく}

らつきようの山

井陘以西芋もなし

昭和十二年十月、山西省忻口鎮附近の敵を攻撃中のことであつた。

敵前三百米の塹壕の中で、木島少尉の當番永澤一等兵は、眠つてゐる少尉の足を自分の膝の上にのせ、はいたまゝの長靴をこつそり磨いてゐた。

打續く苦戦に、幾日も手入をしなかつた靴は、コチ／＼にかたまつてゐた。さぞ足が痛むであらうと思つて、今まで幾度となく、手入をいたしませうと申し出たが、その度に少尉は笑つて、

「そんなことを氣にするな。靴を磨くだけでも腹がすく、よけいな骨を折らずに、じつと

してをれ。」

と、とりあつてくれなかつた。

これは少尉が部下をいたはる、やさしい思ひやりからでもあつたが、事實この頃は、彈藥も糧食もすつかりつきはててゐたので、敵が襲つて來るたびに、一本の銃劍で追拂つたが、その他の時は、少しでも動かすにゐて腹をすかせぬ工夫が大切であつた。それでも一等兵は當番として靴のことが氣にかゝり、少尉が眠つてゐる間に、そつと手入にかゝつたのである。

戦闘と戦闘の間には、夜でも晝でもみんなよく眠つた。そしてよく故郷の夢を見た。それは故郷の家で、白い米の御飯を腹一杯たべる夢であつた。しかしたべようとする時にきまつて目がさめた。自分一人かときまり悪く思ひながら、そつと他の兵に聞いてみると、大抵の者がみな同じやうな夢を見てゐるのである。

「をしいことをした。もう少しでたべられたのに、間一髪といふところで目がさめた。」
「人間も腹がすくと、さもしい夢を見るものだね。」

「しかし、井陘以西芋もなしとはよく言つたものだ。口にあふものはみんな食ひつくしてしまつたからなあ。」

「井陘以西芋もなし。」といふのは、左翼部隊長から軍司令部へあてた報告の文句で、戦線では有名な言葉であつた。

「秋風や、井陘以西芋もなし、とはどうだね。」

永澤一等兵は、得意の句を作つて、戦友に示した。

「は、これは名句だ。故郷の者に聞かせたらさぞ泣くだらうな。」

その時居合はせた木島少尉が、さう言つてほめてくれた。それはつい二三日前のことであつた。

永澤一等兵は、そんなことを思ひ出しながら、尙も靴を磨いた。夜晝ぶつ通しのつかれが出て、少尉はすや／＼と眠つてゐた。そのやつれた顔にとまる蠅を、氣づかれないやうに時々そつと追つた。

糧食空輸

こんな日が何日も續いたが、兵隊はよくこらへた。敵の逆襲があるたびに、まるで人がちがつたやうな元氣で、突きまくつて追拂つた。

この苦戦の最中に、全員を狂喜させるやうな情報が傳はつた。それは部隊本部の無電が、「飛行機ニヨリ糧食ヲ投下ス」といふ報知を受取つたからであつた。

それはもう大變なよろこびかたで、中にはだきあつたり、なぐりあつたりする者さへあつた。もう腹はいくらすいてもかまはぬのである。

「お、久しぶりに米の飯が食へるぞ。」

さう思つただけで胃がぐ／＼鳴つた。塹壕からのびあがり、目が痛くなるほど空を見つめて待つた。

間もなく空の一角に／＼と力強い響が起つて、大型の輸送機が雲と雲の間に、たのもしい姿を現した。

「お、来た、来た。」

誰もが夢中であつた。が、山岳地帯には雲が低く重なつてゐて、機上から、地上部隊を見つけるのは、なか／＼容易でないらしい。飛行機は雲間をぬうてしきりに旋廻した。

「おーい、こゝだ〜。」

たまらなくなつた二三の兵は、塹壕の上に躍りあがつて狂氣のやうに日章旗をふりまはした。

それと見た敵は、一せいに弾丸をあびせかけて来た。

「こら、危い。ひつこまぬか。」

戦友はびつくりして、引きすり下さうとした。けれどもその兵たちはきかなかつた。

「弾が一つや二つあつたつて、これがじつとしてをられるか。」

と、さかんに旗を振つた。

飛行機は友軍の危急を救はうと、決死の覺悟で雲の中から、ぐうん！ と下へ突込んで来た。

「あ、危い。」

山にぶつかりさうになつて、さつと翼をひるがへし、巧みにもとの姿勢に立ち直つた。

その時、座席から日章旗が出て、さつとひるがへつた。「わかつた、見つけたぞ。」といふ合圖である。

「萬歳。」

「萬歳。」

全線から一つせいに歡聲がわきあがつた。

飛行機からは次々に糧食が投下された。空中に落下傘がバツ／＼と開いて、白い花のやうに美しかった。

しかし、無事に下まで届くのは米俵ばかりで、樽詰めのらつきようなどは、途中で空中分解するか、運よく地面に届いても、着いた途端にこはれて飛び散り、強烈な匂をばらまいた。

だが、戦線ではせいたくを言つてはをられない。おかすなどはどうでもよい、米の飯が

たべられるだけでも、もつたいないのである。

「そら炊事だ。快々の々々（早く〜）。」

「折角の米の飯だ。うまいところをたのんだぞ。」

「やはらかすぎずこはすぎず。水加減火加減に氣をつけてくれ。」

「おい〜、炊事當番、そんなことはどうでもよいから、早いところをやつてくれ。先代萩の殿様ではないが、おれはもう待ちかねた。」

「意地のきたない殿様だ。腹はへつてもひもじうないのが、武士のたしなみだ。」

「何でもよいから早いこと〜。」

口々に勝手な注文をつけて炊事當番を激勵した。

五つのらつきょう

「一装用の飯をたいて少尉殿によるこんでいたゞかう。」

永澤一等兵は山を下つて炊事を始めた。一装用とは、こゝでは上等といふ意味の聯隊語



である。

炊事も水汲も、なか／＼の冒険である。ちよつとでも姿を見せようものなら、待構へてゐる敵は、たちまち狙撃をする。折角もつてかへつた飯盒や水筒を撃ち抜かれて、泣くにも泣けなかつた例がいくらもある。

その上山西戦線は水が悪いことで有名である。どの水たまりもドロ／＼の赤い泥水で、キラ／＼と無気味な金気が浮いてゐる。

永澤一等兵は、慰問袋の布で泥水を漉して米をといだ。しかしいくら漉してもきれいにならない、飯盒から流れるとき水はココアのやうな色をしてゐた。

それでも御飯が出来上つた。シウ／＼と飯盒の蓋をふきあげてこぼれる汁、そしてふつ／＼と鼻をつくうまさうな匂。一等兵の空腹の虫はぐう／＼と鳴き始めた。

「一装用にふかしたぞ。見てみる、きつとかにの穴が出来てゐるから。」

手を焼いたり耳たぶをつまんだりして、やうやく飯盒の蓋をとつてみたが、その瞬間、「あッ。」と目を圓くして驚いた。

「これはいかん、本物のかに穴になつてしまつた。」

一等兵はいま／＼しげに舌うちをした。

出来のよい御飯の上面には、蟹の穴のやうにブツ／＼といくつも小さい穴があくものである。飯盒の御飯にもその穴があいてはゐたが、煮えたつた時、水にまじつた泥が上にふきあげて、五耗くらの厚さで表面を掩つてゐた。一等兵が驚いたのも無理はない。泥にうがつた本物の蟹の穴そつくりなのである。

一等兵は、その上の方をはいで自分がたべることにし、下のよい御飯だけを少尉の辨當箱につめて、山の上の陣地へかへつた。

塹壕の中で、愉快な食事が始つた。泥にはよごれ髭はぼう／＼とのびた顔をほころばせて、うまい／＼と舌つゞみをうつた。その中に誰からともなく、山の崖にくだだけて飛散つたらつきやうの話が出て、「あれは残念なことをした。今なららつきやう一つと、弾一つをとりかへてもいいがなあ。」と、言つたものがあつた。

木島少尉も、

「あれこそ一個千金だね。」

と、言つて笑つた。

すぐそばにゐた永澤一等兵は、急に箸を捨てて立上つた。

「少尉殿、しばらく御飯をお待ち下さい。」

一等兵はいきなり塹壕の外へ飛び出した。

「こら、永澤、何をする。」

少尉は驚いて立上つた。一等兵は、右手の山の中腹をころがるやうにして走つて行く。

そこは敵からも味方からも、すつかり見とほしのきく危険な場所である。

「おうい、永澤、早く歸れ。撃たれるぞ。」

少尉は大聲で呼んだ。

永澤一等兵は耳にもかけず、四つばひになつて、草の中をかき〜と探した。そこ

はちやうど、さつき、らつきようが落ちてこはれた場所であつた。

それと氣がついた少尉は、顔色をかへた。

「永澤の命知らずが。」

と、言つてふるふる唇をかんだ。

敵は一等兵目がけて、機銃をあびせかけた。前後左右の草は千切れて飛び、土がバツバとはねあがつた。それでも一等兵は探すのをやめなかつた。

戦友は氣が氣でない。

「永澤。早く〜。」

と、口々に呼んだ。

少尉はたまらなくなつて、

「永澤、しつかりしろ。」

と、塹壕の上に飛びあがつた。一等兵はちよつとこちらを向き、来てはいけないといふやうに手を振つて、一散にかけ戻り出した。弾丸は一そう激しく、その後を追つかけて飛んで来た。

一等兵は塹壕へ飛び込んで、兩方の掌をあけて見せた。その中には土や草にまみれた

らつきようが五つあつた。

「危いことをする奴だ。今からあんなことをすると承知しないぞ。しかし折角の心づくしだ。みんなもたべてやつてくれ。」

少尉は胸をなで下して口では叱りながら、分隊に一つづつ分け與へた。

一つのらつきようを十四五人でたべることになつたから大變である。皮を一枚づつはいでは次へまはすことにしたが、自分だけはたべないで、戦友にたべさせようとする者ばかりだから、らつきようはなか／＼細くならなかつた。

少尉は永澤一等兵に、

「命がけの御馳走だ。お前もたべろ。」

と、自分が一皮はいで、一等兵に渡した。一等兵は皮をはぐやうなふうをして、指をしやぶつただけで少尉に返した。

少尉はふと、一等兵の飯盒を見るなり、

「こら、永澤。その飯は何か、そんな泥まみれの飯を一人でたべる奴があるか、このわし

によい飯をたべさせようと思つても、わしは、お前がそんなことをするならば、もうたべないぞ。」

さう言つて叱つた。その目に涙が一ぱいあふれてゐた。

敵襲

大波のやうな起伏をして重なり合つた山岳に日が暮れた。晝のうちから中天にあつた月は、利録のやうに冴えてきた。

今晚も来るかと待ちかまへてゐると、敵陣で、チャルメラのやうなラツバが鳴り出した。案の定今晚も又夜襲して来るのである。支那軍の夜襲は、日本軍のやうに、銃剣をふるつて躍りこむのとは趣きがちがつてゐる。敵前五十米くらゐの所で必ずとまる、そして無茶苦茶に射撃してみても、相手が浮足立つたら突撃しようといふ戦法である。

「又、やつて来たぞ。かまはぬから撃つだけは撃たせて、それから突撃をしてやれ。」

木島少尉は、兵をまとめて待たせた。兵もすっかり呼吸をのみこんでゐるから、少しも

驚かない。待つうちに敵の射撃はやんた。

「今だ。突込め。」

木島少尉の日本刀が月の光をうけて、大きくキラリと光った。

黒い影と影がぶつかり合ひもみあひ、劍と劍と打合つて火花を散らした。手榴弾が方々で破裂する、その閃光の中に黒い人影がばた／＼と倒れた。

敵はこらへきれなくなつて、ぞろ／＼退却を始めた。その後を追ひかけ、

「もう一息だ。」

と、そのまゝ敵陣へ突込まうとすると、待ちかまへた敵の機關銃が、バツ／＼と火をふいて迎へ撃つた。かうして敵味方の區別なく打倒してしまふのが支那軍のやりかたである。かうなつては無茶に進めない。

「いま／＼しい機關銃だ。おのれ、今に踏みつぶしてくれ。見てをれ。」

兵隊は齒ざしりをしてくやしがりながら、塹壕の中へ引返して來た。木島少尉は人員をしらべて、異状がないことをたしかめてから、

「あの機關銃をやつつけないうちは手が出せない。いま／＼しい奴だ。」

と、残念さうにつぶやきながら、刀をさめようとすると、鞘がなくなつてゐた。

「しまった。鞘をやられた。青龍刀でも革くらゐは切れるとみえる。」

少尉は切取られた吊革の残りをつまぐつて苦笑した。

機關銃爆破

その夜ふけて、永澤一等兵は、かたむく月の光をたよりに草の根をかきわけて、らつきょうを探してゐた。一等兵の腰には、少尉がなくなつた軍刀の鞘がさゝれてゐた。少尉に言ふと又叱られるにきまつてゐるから、無斷で陣地をしのび出たのであるが、一等兵は鞘だけで満足しなかつた。あくまで豪膽で主人思ひの彼は、ついでに朝御飯のおかすにするつもりで、らつきょうを探し始めたのである。

大陸の山はすでに霜が置く。草をかきわける指先が針をさすやうに痛む。その指先につまみあげて月の光にかざし、それから鼻へもつていく。石ころをつまんで苦笑することも

あるが、ていねいに草の葉や土を落してポケットにしまふこともある。一等兵のポケットはだんくふくれた。それを上から押さへてみて、

「これでよし。」

と、始めて満足して立上つた。

しかし、その時は、月が落ちてゐた。どこか遠くの山のいたゞきに、わづかに月かげがあるばかりで、低い谷間は眞暗になつてしまつた。夢中で探し廻つてゐたから、自分が今立つてゐる位置さへわからない。

「さあ、困つた。同じ恰好の山ばかりだから、どつちへ行つたら歸れるかさつぱりわからん。」

一等兵は山の姿を空にすかして、多分この方角だらうと見當をつけて登つて行つた。音を立てぬやうに登つて行く中に、どうも自分の陣地ではないやうな氣がした。『おーい。』と呼べば、すぐにわかることだが、敵前では聲を立てることも出来ない。

「え、どうでもいい。間違つたら、その時のことだ。」

覺悟をきめて行くうちに、掘上げたボロ／＼の土のある所へ行きあたつた。斬壕に來たのである。

「しめた。」と、よろこんでそこへはいらうとすると、突然、

「誰呀。(誰か)。」

と、とがめられた、支那語だ。

「しまつた。」

うっかり敵陣へまぎれこんでしまつたのである。しかし一等兵はすぐ度胸をきめた。

「なに、糞。」

と、飛びかゝるが早いか、銃劍をふるつて忽ち歩哨を一刺にした。歩哨は悲鳴をあげてどうと倒れた。

一等兵は銃劍をたぐり寄せたはすみに、自分も仰向けに倒れて、腰をいやといふほど固い物にぶつつけた。手を後にまはして見ると、そこらにごろ／＼ころがつてゐるのは、手ざはりでそれとわかる敵の手榴弾である。



「しめた。これさへあれば千人力だ。」
と、ひつ掴んで立上つた。

うとくと眠つてゐた敵は、歩哨の叫聲にびつくりして、すぐ上の陣地から探照燈を照らし出し、ボン／＼と照明弾をうちあげた。赤や青の照明弾が、まるで花火のやうにあたりを照らした。

日本軍の夜襲と思ひこんだ敵は、あわてふためいて、無茶苦茶に機關銃を撃ち出した。一米もある火の舌が陣地の方々に閃めき出した。

「これはおあつらへ向きだ。見てろ、あの機關銃め。」
幾度か友軍をなやました、うらみ重なる機關銃だ、その機關銃の火花を目がけて、一等兵は力一ぱいに手榴弾を叩きつけた。物凄、火柱と共に機關銃も敵兵もこな／＼にふつ飛んでしまつた。

芋の味

敵陣の騒動は友軍の塹壕から手にとるやうに見えた。つき／＼に機關銃がふつ飛び、あわてふためいた敵兵が、悲鳴をあげて右往左往する有様は、まるで地獄繪のやうな光景であつた。

木島少尉は、その様子に、じつと目をそ、いでゐたが、

「何部隊か、敵陣に襲ひかゝつたぞ。夜襲は成功してゐる。それ、この時をはづすな。突撃、突撃。」

と、叫びざま、隊を率ゐて、真先に駆け出した。

敵陣はすでに浮足だつてゐた。銃聲だけははげしいが、弾はとんでもない方角へ飛んで行つた。

木島部隊は、苦もなく敵陣へとりついて、「わーつ。」と喊聲をあげてなだれ込んだ。突く、なぐる、蹴る。世界無比の肉弾突撃の威力には、さしもの敵陣地も忽ち崩れたつて、生きのこつた敵兵は命から／＼退却した。

木島少尉は、やがて部下をまとめてあたりを見まはした時、「おや。」と思つた。そこに

は、他の部隊の者の姿は一人もなかつたのである。

少尉はいぶかしく思ひながら、人員を點呼すると、たゞ一人永澤一等兵の姿が見えなかつた。

「永澤、永澤。」

戦友たちは、口々に名を呼んで探しまはつた。

永澤一等兵は、両手に手榴弾をにぎりしめて、塹壕の底に倒れてゐた。あまりに接近して投げたので手榴弾の破片が、その胸に深くくひ入つたのである。

「さうか。機關銃爆破は永澤一人の仕業だつたのか。」

戦友は口々に感嘆しながらそのまはりに集つた。

「永澤。しつかり目をあけて見てくれ。憎い機關銃は目茶々々になつたぞ、おかげで敵陣を首尾よく占領したぞ。」

少尉は一等兵をだき起して、はげしくゆすぶつた。

一等兵は、ばつちりと目を見開いて、

「少尉殿、これを。」

と、鞘を差出し、それからポケットに手を入れようとしたが、もう自由がきかなかつた。

戦友はいそいでポケットをあらためた。中かららつきょうがころ／＼と出てきた。

「少尉殿、これで朝御飯を。」

「お、永澤。」

少尉は感極まつて手をにぎりしめた。

一等兵は、かすかな笑をうかべて、苦しい息の中から、

「もつたいなく思ひます。永澤は、少尉殿によるこんでいたゞくのが何よりのよろこびです。少尉殿、永澤は、忻口鎮の土になつても、魂は少尉殿を守ります。少尉殿の御武運を祈ります……天皇陛下……」

と、おそれおほいお名をとなへたのが最後であつた。

永澤一等兵は、最後まで、當番兵として、その務を果すことで一杯であつたのである。

朝になつて、遺骸を埋めて墓標をたて、何も供へる物がなかつたかららつきようの前に置いた。

×

×

×

このらつきようの山の占領が忻口鎮陥落の口火になつた。

そして忻口鎮の陥落は、太原を九分まで陥れたも同じだつた。皇軍はなだれをうつて敗走する敵を追ひかけ一氣に太原城を占領した。

昭和十二年十一月八日、記念すべき太原入城の日、木島少尉の部隊もその城内に落着いて、久しぶりに疲をやすめ、その食膳にはほか／＼と温かく煮えた芋がのせられた。

少尉は、それを口に入れようとして、思はずホロリと涙を落し、

「永澤に、一口食はせたいな。」

と、言つた。

もう一人食はせてやりたき芋の味

これがその日に出来た、少尉の手向けの句であつた。

母の軍刀

一

永定河の濁流には、眞夏の日が照りつけて、ギラ／＼とあぶらぎつて光つてをりました。對岸の敵は、陣地をきびしくかためて、河を渡つてくる日本軍を、一兵も残さず河中に葬らうとしてゐるのでした。これに對して、こちらはすつかり渡河準備ををはり、じつと堤のかけに伏して、命令が下るのを今か／＼と待つてゐました。敵味方にらみ合つたまゝ、静まりかへつてゐる無氣味な殺氣が、土にも草にも水の上にも、かげろふのやうに立ちのぼつてゐるのが感じられました。

その時突然、重いエンジンの音がとゞろき始めました。友軍の先頭を承る戦車中隊

が、いよいよ陣頭へ乗り出して来たのです。戦車隊は河岸にかゝると横隊になり、濁流うづまく河の中へ、しぶきを飛ばして走りこみました。堤に伏せてゐる歩兵隊は、戦車といふやつは無茶なことをするものだ。深さの見當さへつかぬ河へ飛込んで、もしもどつぷりとはまりこんだらどうするつもりだらうと、我がことのやうに氣をもみました。

しかし、そのへんに手ぬかりはなく、これまで度々の偵察で、淺くて渡るに都合のよいところが、ちやんとしらべてあつたのです。

敵は河中の戦車群目がけて、一せいに火蓋をきりました。對戦車砲や野砲は、猛獸のやうに咆えたてる、機關銃や小銃は氣違のやうにわめき散らす、友車も敵の砲火をおさへて、戦車の前進を助けようと、猛烈にうち始めました。兩方の銃砲聲で、天も地もはり裂けるかと思はれるばかりです。

戦車のまはりには無数のものすごい水柱が立ちましたが、戦車群は物ともせず突進して、見る／＼うちに河の中流を乗りきり、敵陣目がけて怪獸のやうにをどりこみました。

今村軍曹の乗つた戦車は、一番右の方を進んで行きましたが、もう少しといふところ



で、プス／＼と河底の泥にめりこんでとまつてしまひました。

『しまつた。』

軍曹はあせつて、せい一ばいにエンジンをかけてみましたが、もがけばもがくほど泥を掘りさげて、車體がだん／＼水中へもぐつて行くばかりです。

『敵陣を目の前に見ながら、存分に踏みにじれぬとは残念だ。』

と、齒ざしりをしてくやしがりましたが、今更どうすることも出来ません。そこで軍曹は射手に射撃を命じて、他の戦車の前進を助けさせ、自分は手早く軍服をぬぎすてて眞裸になり、背中へ軍刀を背負つて、うづまく濁流の中へ躍りこみました。

『あ、軍曹殿。』

と、部下が叫んだ時には、軍曹の姿は水中に見えなくなつてをりました。

軍曹は敵陣をさけるために水中にもぐり、頃合をはかつて隊長の戦車の後に浮かび上りました。そして戦車につかまつて、ぶる／＼と頭の水を切り、心配するなといふやうに、うしろへにつこり笑つて見せました。

戦車群は上陸して、どつと敵陣におそひかゝりました。軍曹は戦車の後で、背中の中軍刀をスラリとひき抜きました。

戦車が敵陣に突入すると同時に、今まで身をひそめてゐた歩兵隊は一せいに飛立つて、ざぶ／＼と濁流の中へ躍りこみました。

戦車群は、敵陣をさん／＼にふみにじりました。しかし敵兵もなか／＼勇敢です。手榴弾をふりかぶつて戦車に叩きつけようとする者がありました。そんなのは戦車の中から、ねらひうつてしまひました。中にも隊長の戦車に向かつてきた敵の勇士は、手榴弾を五つも六つも抱いて、戦車もろとも爆死しようとはだてました。こんな爆弾勇士にかゝつては戦車だつてたまりません。

『危ない。』

と叫んで、戦車から小隊長が、軍刀をひつさげて躍り出ました。

しかしそれより早く、かけよつた裸の勇士今村軍曹の軍刀が、支那兵の頭の上で大きく輪を描いてきらめきました。

と思ふと軍曹の刀は、支那兵の鐵兜をうち割り、顔を半分まで切下げてをりました。

「見事だ。今村、刀は大丈夫か。」

と、煙の中から小隊長が聲をかけました。

「大丈夫です。お母さんの軍刀です。」

軍曹はかう叫ぶなり敵中に飛込んで、突きたふし斬りたふし、鬼神のやうにあればまはりました。

その時はもう歩兵隊が渡河して来て、突撃にうつつてをりました。戦車は逃げまどふ敵を踏みにじり、歩兵は銃剣をふりかぶつて、叩きつけたり突き伏せたりしました。その中でも唯一人の裸勇士今村軍曹の奮戦ぶりは目立つて勇ましく、何物かの靈がこもつてゐるかのやうに、よく切れる軍刀は、きらりとひらめくたびに血煙をあげました。

敵はかなはずどつと退却し始めると、歩兵隊はすかさずあとにくつついて追撃にうつりました。

重大な任務を終つた戦車隊は、一應ひとところに集つて陣容をととのへ、今村軍曹の戦車

は、太いロープをつけて引きあげられました。

軍曹はその戦車を調べてみて、

「よかつた〜。これが沈んだら自分は生きてはをらぬつもりであつた。」
と、胸をなで下しました。

二

新戦場に夜が来ました。水のやうに澄んだ空には、白い月が冴々と光つてをりました。戦車は明日の出勤に備へて、入念な手入がほどこされ、すらりと並んで月光をうけてをりました。月光をうけた半面は、戦闘中にうけた弾丸の痕や、一本々々銃の形まであざやかに浮かびあがらせ、一方の暗い半面は、伏せた巨象のやうに物々しい影をつくつてをりました。その暗い影の方で、チロ〜と虫の聲が聞えてをりました。

今村軍曹は、戦車の傍にどつかと坐つて、軍刀の手入を始めました。月の光にかざして見れば、鏢元から切先まで一點の曇りもなく、青白い光をはなつてをります。



軍曹は、ほつと吐息をもらして、軍刀をおしいたゞき、

「お母さん。見てゐて下さいましたか。」

と、つぶやきました。

さきほどから、その様子にじつと見入つてゐた人影が、この時つか／＼と近よつて、軍曹の肩に手をおき、

「今村軍曹。」

と、呼びました。軍曹はふりかへつて、

「あ、小隊長殿。」

と、思はず立上らうとしました。

「いや、そのま／＼。しかし、今日の裸の武者振はすばらしかつたな。先づ第一番の功名だね。それに、その軍刀の切味はすごかつたこと——鐵兜ぐるみ割りつけたではないか。ところで、あの奮戦中、お母さんの軍刀だといつたやうだが、それには何かわけがありさうだな。戦には勝つし月はよし、一つそのお母さんの軍刀について承らうではないか。」

小隊長はさう言ひながら、どつかりと坐りこみました。

「恐れ入りました。しかし實は、この刀には何も申し上げるやうなことはありません。何分にも今村はおはづかしい身の上だものですから。」

「さう言はれ、ばかへつて聞きたくなるのが人情だよ。君の家庭の事情については、うすうすには承知してゐる。わしは隊長として、部下の一身上のことは、何でも知つておきたい。人に言つて悪ければ決して他言はせぬ。どうだ、わしにだけ話してくれないか。」

部下を思ふ隊長の言葉は、ひし／＼と軍曹の胸にこたへました。軍曹は覺えず涙ぐんで言ひました。

「有難いお言葉です。つまらぬことに御心配をかけてすみません。」

「何を言ふのだ。隊長と言へば父、部下と言へば子、他人ではない、親子の間柄ではないか。」

そこで軍曹は、晝間の戦闘であの鬼神の働を見せた勇士とも思へぬ重い口つきで、ぼつり／＼と語りだしました。

今村軍曹の家は、その町でも舊家で、祖先はりつばな槍一すちの武士でありましたが、父の代に破産して、家財道具まで全部賣拂つてしまひました。その折祖先から傳つた祐定の名刀も、同じ町に住む分家の今村權右衛門といふ老人の手に渡つてしまひました。

その後、おちぶれた軍曹の家と、金持の分家との間に仲たがひが出来て、おたがひに往き來をしなくなりました。

中學を卒業した年に父親がなくなりました。母一人、子一人になつた軍曹は、やさしい母にはげまされつゝ、一家の復興を志してはげんでをりました。

そこへ今度の事變が起つて、軍曹は勇ましく出征することになりました。年老いた母は、我が子を町の驛まで見送つて行きました。

軍刀をつるほどの身分のものは、いづれもこの晴の出征にあたつて、家に傳る名刀を持ち、それが無い者は新しく買求めて、意氣揚々として出征しました。

その中で軍曹だけは、普通下士官に下げ渡される軍刀をつつてゐたのです。昔であれば槍一すちの家柄で、いざ出陣といふ時には、はなやかな物の具に身をかため、祖先傳來の太刀を佩いて出かける身分だつたのにひきかへ、人並のことさへしてやれぬ今の境遇のかなしさ、母は、我が子の胸中をおしはかつて、せめて軍刀だけは一人前のものを持たせてやらうと決心しました。

そこで、軍曹を物かげに呼んで、さゝやきました。

「お母さんがね、その中にはりつばな軍刀を送つてあげますよ。」

軍曹は、母の慈愛が胸にしみました。

「何をおつしやるのです、お母さん。これでたくさんです。これはお上から下さつた立派な軍刀ですよ。これさへあればどんな働きでも出来ます。哲夫は皇軍の一員です、この體中を流れる血が、この軍刀をどんな名刀よりも立派に役立てて見せますよ。」

軍曹は、かへつて母をはげまして、勇ましく出征して行きました。

しかし、母親としてみれば、そのまゝではどうしても氣がすみません。驛からかへる

と、恥をしのんで分家へ行き、祐定の刀をゆづつてほしい。代價は何とかして必ず支拂ふからと、こんくんとたのみました。

「それは無理なたのみといふものですよ。あれは私の家にとつて大切な刀だ。この後私の家からだつて出征軍人が出ないとは限らない。その時はあれを持つて行かねばなりませんからね。」

権右衛門は、せゝら笑つてとりあひませんでした。

母はこの上おしてたのんでも無駄だとさとりました。そこで家にかへつて、佛壇の下の戸棚を探して一口の刀を取り出しました。家財を賣拂ふ時に残つたくらゐの刀ですから、もとより名もないつまらぬ刀です。それにもう眞赤にさびてをりました。母はその刀を先祖代々の佛の前にさゝげて、

「何とぞ、これが名刀であつてくれますやうに。私は身も心もこの刀にこめます。そのために私の命をお召し下さいませてもかまひません。」

と祈りました。そして研定といふこの町で有名な研屋へ持つて行きました。

「御隠居さま、お氣の毒ですが、これはものになりませんわい。」

と、研定はろくに見もしないで首をふりました。

「研定さん、ものになるか、ならんか、研ぐだけは研いでみて下さい。その刀には祖先の魂がこもつてゐます。私の命もそれにこめてあります。りつばなものにならなかつたら私は生きてはゐませんよ。」

母の必死な顔つきをじつと見まもつてゐた研定は、にはかにあらたまつて坐り直しました。

「ようがす、やりませう、それほどの御決心なら、研定も命がけで研ぎあげます。わたしも變人とか名人とか言はれた男だ、まづい仕事をしたら、この首を持つて行つて、御先祖の前に供へて下さい。」

研定は膝を叩いて引うけました。

四

研定は、母親をかへすと、その刀をもつて権右衛門の家に飛んで行きました。

「日那はいらつしやるか。今日は研定が日本一の名刀をお目にかけて来た、さう言つて取りついで下さい。」

と、玄關先でわめきたてました。

「どんな名刀か知らぬが、うちには祐定がある。なまくら刀を持込んで、がみ／＼やかましく言ふな。」

権右衛門もけんくわ腰でどなりました。

「その祐定と取りかへに来たのだ。日本一の刀といふのはこれです。よくごらん下さいよ。」

研定は、刀を抜いて目の前につきつけました。権右衛門は、研定のはげしい勢におされて二三歩さがりましたが、

「なんだ、その刀が何で名刀だ。薪割にだつて使へないなまくらぢやないか。」

「さうでせうとも。日那のやうな非國民には、そんな刀に見えるでせうよ。」

「なに、なんだと。研定、もう一べん言つてみい。なんでこの権右衛門が非國民だ。次第によつては承知しないぞ。」

「ハ、……。非國民と言はれて腹が立つやうなら、まだ日本人らしいところがある、それならそのわけを研定が申しませう。實は、この刀には子を思ふ日本一の親心がこもつてあるのですよ。」

そこで研定は、本家の御隠居、つまり軍曹の母親がこの刀を持つてきたこと、それで自分も尊い親心にうたれたことを話し、日本は今支那と戦争中であるが、出征軍人は家をして親をすて命をすてて戦つてゐる。その軍人に對して、銃後の我々は身に出来ることなら何でもしてあげねばならない。それが日本人たる者のつとめだ。いかに名刀とは言へ、たかが刀の一本や二本がなんだ。しかもあの祐定は本家に傳はつてゐた刀だといふことは、この研定が誰よりもよく知つてゐる。若し日本の國民であつたなら、出征のお祝にと言つてのしをつけておくのがあたりまへではないか。それであるのに、御隠居のたのみをすげなく斷つて追返すとは何事だ。自分は必ずりつばに研いであげますとは言つたが、いく

ら研定でも、このなまくらではどうにもしやうがない。そこで旦那にたのんで祐定をゆづりうけ、あの刀はこんな名刀でしたよと言つてよろこばせようと思つたのだ。さあ、研定が命がけのかけあひだ。これがわからぬとあればいよく非國民ですよ、研定は拳で涙をこすりながらまくしたてました。

権右衛門は、すつかり言ひまくられて、「うむ。」とうなるばかりでした。

「お父さん。」

その時、奥から権右衛門の娘のユキ子が出て来ました。

「すつかり聞いてゐました。研定さんの言分はもつともです。刀の一本や二本が何です。お國のためです。祐定の刀を哲夫さんへ送つてあげて下さい。行きたくても行かれぬ私の代りに、せめて刀をお役に立てて下さい。」

ユキ子は、涙をいづばいたためて父にせまりました。

権右衛門は、なんと思つたのかいきなり研定の手からその刀をひつたくつて、ものも言はずに奥へひっこみました。

「お父さん、お父さん。」

ユキ子は父の後を追つてかけこみました。

研定があつけにとられて、ぼんやりしてゐるところへ、やがてユキ子がいそぐと出て来て、見事な刀箱を渡しました。

「これが祐定です。どうぞ哲夫さんへ送つてあげて下さい。父は何も言ひませんけれども後悔してゐます。父も悪い人ではありません。やはり日本人だと思つて下さい。でもこのことが本家の小母さまに知れると、小母さまの氣質として、本當に生きておいでにならぬかも知れません。やつぱり研定さんが、あの刀をりづばにしあげたことして下さいね。これで父も私もゆるして下さいね。」

研定は、「わあー。」と聲をあげて刀箱をおしいたゞき、

「わかつた〜。ありがたい〜。」

と、涙をこぼしてをりましたが、

「ありがたい。日本人だ。みんな日本人だ。これで千人力だあ。」

と、ぐいと鉢巻をしめこみ、刀箱をかゝへこんでかけ出しました。

五

「斬れるわけだ。それでこそ斬れるわけだ。」

小隊長は、深い感激にうたれて、うめくやうに言ひました。

「もとより刀は祖先傳來の業物である上に、お母さんの魂がこもつてゐるのだものなあ。」

「さうであります。その上研定さんと分家の親子の美しい心がこもつてをります。研定さんの手紙の中に、お母さんは、あの刀がりつばにしあがつたものと思つてゐられますから、あなたもさういふことにしておいて、お母さんのお志をそのまゝうけてあげて下さい、と書いてありました。」

「さうだ、時が来てお母さんにわかるまでは、その言葉どほりにするがよい。それにしてもうれしい話をきいたものだ。これはひとり君のお母さんや、研定や、それから分家の親子ばかりのことではなく、銃後全體の心であることを思ふ時、我々はうつかりしてはをられ

ないね。」

「さうであります。それを思ふと今村は、生きかはり死にかはり命が七つほしい氣がいたします。」

「その氣持だ。しかしおたがひに一つしかない命だから、最後まで大切にして置くことだね。そのためにぐつすり眠つて置くことだ。明日は又激しいからね。」

小隊長は、軍曹の肩をたゝいていたはり、靜かに去つて行きました。

軍曹は、やがて天幕にかへり軍刀を抱いてごろりと横になりました。この美しい夜の夢には、この名刀にこめられた祖先の魂が、母の愛が、そして銃後の人々の眞心が、あたゝかく通ふのであります。

虫の音が冴えて、夜がふけて來ました。

鳩と兵隊

—

道は、「風蕭々として」の詩で有名な易水にそつて、うね〜とつゞいてゐる。私たちのトラックは、黄塵をまきあげながら、時々易水の流れをつつきつて走つた。

主力部隊は、もう二日前にこの道を通つて敵を追撃中とのことであつた。私たちの心はやりにはやつた。一時もはやく主力部隊と一しよになり、敵を追ひまくつてやりたかつたのである。

「のろいトラックだ。駆足ほどもスピードが出ん。」

と、不平がましくいふ者があつた。みんなは顔を見あはせて笑つた。その顔に黄塵がまゐるで白粉のやうにくつついてゐて、笑ふとごは〜音がするやうに感じるのである。所々に土でこねあげてつくつた家があつた。その屋根に穴があいてゐるのがあつた。馬だの人だの死骸がまだころがつてゐて、ものすごい戦闘の有様が思ひやられるのである。「なんだ、人のやつた後を見學するばかりぢやないか。」

なぞと、つまらなさうにつぶやく者があつた。しかし、逃げおくれた敵は、まだうよ〜と残つてゐた。わが主力部隊の追撃があまりに急だつたので、敵は左右にバツと散つて、山の上や谷間などをうよ〜してゐるのである。山あひの細い道にさしかゝつてくると、上の方からはげしい射撃をあびせかける。私たちは鐵兜を目深に引きさげて、どん〜トラックをはしらせた、こんなつまらん敗殘兵にかまつてはゐられない。「前へ〜。」と心はせきにせく。

そのうちに、主力部隊が奮戦したといふ紫荆關の城壁が、そ〜り立つ岩山の上に見えてきた。隊はこゝでハタと行きづまつた。これから先はトラックは行けない。峻しい山肌をぬうて道はうね〜と登つてゐるのである。

トラック隊は、こゝから引返した。「さあ、行軍だ。」私たちは背囊を負うていきほひこんでみると、とつせん私の分隊へ命令がくだつた。

「氏原分隊は、現地にとゞまつて、連絡路の確保に任すべし。」

と、いふのである。つまり、前進して行つた主力部隊と、すつと後方にある部隊本部との中間にとゞまつて、大切な連絡の道を守つてをれといふのである。

「あゝ〜。」

私の部下の兵たちは、がっかりして不足がましくぼやいた。前線へ〜と、きほひ立つてやつてきた今になつて、いきなりこの命令ものだから、力ぬけするのも無理はない。

中隊長はこの様子を見て、頭から叱りつけた。

「お前らは、この任務が不足か。何といふつまらない考へ方をするのだ。お前らがこゝを守りおほせるかどうかで、主力部隊の運命がきまるのだぞ。お前らも見てきたやうに、敵はそこら中に澤山残つてゐる。えらばれてこの危険な任につく者こそ第一の光榮ではないか。いやならいやでよろしい、他の隊に言ひつける。」

「やります、隊長殿。」

「あゝ〜と言つたのは、あれはあやまりであります。」

私の分隊の兵は、あわててわびを言つた。

「よろしい。不服を言うてはいかんぞ。お前らの心は隊長がよく知つてゐる。叱つてすまなかつた。しつかりたのむぞ。」

中隊長はにつこり笑つて、私の方へ手をさしだした。その手をしつかりにぎつて、私は思はず體がふるへた。私の隊の兵たちは棒をのんだやうに固くなつてつ立つ立ち、目だけキラ〜光らせてゐた。

二

残された私たちは部落にはいつて、すぐに警戒の兵をたて、家屋をえらんで寢床をつくり、かまどをつくつて炊事の準備にとりかゝつた。

兵隊はどんな所にも、すぐに生活の根を下す。どんなにきたない支那家屋でも、二三

十分間はたゞやつてゐたかと思ふと、もうござつぱりした住居に變つて、床の上には藁であんだござまで敷かれる。背囊から飯盒をばづして一寸ごちや／＼鳴らしてゐたかと思ふとそれでも飯がたけ、おかすが出来てゐる。たべてしまつた罐詰の罐を、カン／＼たいてゐたと思ふと、もうそれに柄がついて、汁杓子になるといつた調子である。

このあたりは共産軍が暴れまはつてゐたところだから、日本軍がくるより前から、住民はほとんど逃げてしまつてゐたらしく、部落は見るかげもなく荒れはててゐる。家の戸といはず、窓わくといはず、すべて焚物になりさうなものはみなひきはがされてをり、穀物といふ穀物、野菜といふ野菜、家畜といふ家畜はすべて食ひつくされてゐた。私たちはそのひどい様子を見て、かうまでよくも完全に荒らされたものだと思はれるとともに、支那軍の亂暴さをにくみ、支那の民衆をあはれますにはをられなかつた。

夕方、警戒の兵がかけて来た。

「左手の谷間から煙が上つてをります。その谷間へ約二百名くらゐの人数が、ぞろ／＼と下つて行く様子です。」

と、言ふのである。

私は警戒線まで出かけて、そこから偵察した。なるほどうすい煙が上つてゐる。あの谷間はかなり廣いやうだから、部落があるにちがひない。しかしこゝの部落の有様から察して、あそこにも住民がゐようとは思へない。さうするとあの煙は敵のゐるしではあるまいか。さう考へて私は目をこらして見たが、敵兵らしい者はもう見えなかつた。

警戒の兵は、

「すつかり下つて見えなくなつてしまひました。住民があれだけ一しよになつて動くとは思へません、たしかに敵です。」

と、言つた。若い兵だが落ちついてゐて、判断もしつかりしてゐる。私はたのもしく思つた。

煙は左の谷ばかりではなく、右の方の谷間からも上つてゐるのである。それで私たちは敵の中にあるのだといふことがわかつた。それならそれでよしと思ひ、かへつて心が落ちついた。

「これはちよつと手ごたへがありさうだ。前進した者より運がよかつたかも知れないな。」
私は、ひきかへして笑ひながら兵たちに言つた。

「さうらしいです。今夜あたり偵察してみませうか。」

「いや、さういそがなくてもよい、敵が逃げる氣づかひはないのだから。今晚はぐつすり眠つた方がいゝ。明日からはいそがしくなるだらうからね。」

戦闘にも敵にもなれてしまつた私たちは、負け惜しみでもなく、強がりでもなく、平生のやうな口をきいた。

私たちは夕食を腹一ぱいつめこんで眠ることにした。しかし警戒だけは嚴重にして、みんながかはり番に立つことにした。私は、軍刀をだいて、あふむけに寝ころんだ。すると床に敷いたござがふんはりとはすんで氣持がよい。

「まるで羽根蒲團のやうだが、何がいられてあるのだね。」

私はふしぎに思つてきいた。

「それは綿です。この家に残つてををつたものですから。」

と言ふ。

「わたしの寢床だけ入れたのではあるまいね、それではいけないよ。」

「そんなことはありません。みんな少しづつわけて敷いてをります。」

兵は少しせきこんで答へた。

私は、そつと隣の兵の寢床に手をやつてみた、それと氣がついたらしく、隣の兵はごろりと寝がへりをうつて體でかくし、私にさぐらせないやうにした。それで私にはすぐにはわかつた、兵の寢床には綿も何も入れてないのである。

「……………」

私は、もう、何にも言はなかつた。

(さうか、ありがたう……)

心の中で禮を言つて、兵の親切をうけることにした。

銃聲がした。左の谷間らしい。すると、それに應ずるかのやうに右の谷間でもした、二發三發した。

兵たちは、むつくりと起きあがつた。私はそれをなだめて、

「起きることはない。なにか合圖あひづでもしてゐるのだらうが、心配はない。眠れ〜。大丈夫だいぢゆうだ。」

と、寝たまゝで言つた。

「大丈夫でせうか。」

深夜しんやの銃聲じゆうせいに昂奮かうふんした兵たちはなか〜眠らうとしなかつた。しかしそれから、銃聲は聞えなかつた。やがてあちらこちらで、かすかないびきを立てる者が出てきた。

私も、うと〜眠つたやうな気がした。すると、

「クウ、クウ、クウ。」

と、屋根の上の方でなにか鳴くやうな聲がした。私は「おや。」と思つて目がはつきりさめた。

「鳩の聲ではありませんか。」

「三三人へだてて寝てゐた三宅みやけ一等兵が言つた。」

「さうらしい、君も聞いてゐたのか。」

「さうです。どうもさつきからかさこそと音がするやうですから、自分の體からだが藁わらにふれる音かと思つて、幾度もためしてゐる中に、あのクウ〜が聞えました、どうやら子鳩こぼとがかへつてゐるやうです。」

私たちが聞耳を立ててゐると、いかにも子鳩らしい聲で、

「クウ〜。」

と鳴いた。すると今度は、子のむづかるのをなだめるかのやうに、親鳩の、

「クウ〜。」

といふ聲がした。

「今のは親鳩だな、たしかに子鳩がかへつてゐる。」

「さうです〜。何だか心がうき〜して來ました。」

三宅みやけ一等兵は、たのしさうな聲をはすませた。

この殺風景ころぼうけいな戰場せんぢやうで、しかも敵の銃聲のひびく夜、かうした親と子のむつまじい聲を聞

かうとは、夢にも思はなかつた。ふと、私は國へ残してきた子供たちのことを思った。まだ幼い兄弟の子供をつれて、お宮にまゐつた時、鳩に豆をやると言つて、いつまでもそこを立去らうとしなかつた、あのいちらしい子供の姿を思ひだした。三宅も、子供の時分のお祭を思ひ出してゐるかも知れない。

三

朝、まだ暗いうちに、私は三人の兵をつれて後の山にのぼつて行つた。このいたゞきに立てば、左右の谷を見下すことが出来るからである。

頂上ちやうじやうにのぼつた頃に、夜がすつかり明けはなれた。

思つた通り左右の谷は相當さうたうに廣かつた。朝靄あさもやがたなびいてゐて、何も見えないが、湖みづうみの面のやうな靄かすみの底そこにはかなり大きい部落があるらしい。

そのうちに靄かすみが晴れて行つた。部落の中には人間がうよ／＼してゐる。敵兵だ。家屋かやと家屋の間に集つて、しきりに何かやつてゐる様子ようすだ。その間から車のやうなものが見える。



山頂の三郎

私はいそいで双眼鏡をあてて見た。それは迫撃砲である。一つ二つ三つと、見えてゐるだけで三門ある、敵はその手入をしてゐるところである。

これはなか／＼容易ならぬ敵だといふことがわかつた。

私たちは、早く防備をかためる必要がある。すぐに部落へ引つかへさねばならない。しかし私はその前に敵の度胸をためしてみたくなつて、

「あの中へ二三發うちこんでやれ。」

と、命じた。兵たちはよろこんで、つゞけざまにうちこんだ。敵兵はあわてふためき、砲も何も置きつばなしにして、家の中へ逃げこんだ。私たちは腹をゆすつて、アハ、ハ、ハ、と笑つた。

「あのざまはなつてゐないな。砲があらうと、人数が多からうと、驚くにはあたらな、い、ぼつ／＼歸つてお客さまをもてなすしたくにかゝらう。」

私たちは意氣揚々と山を下つた。敵はおちけづいてか、一人として姿を見せなかつた。

部落にかへると、すぐに防備にとりかゝつた。部落のまはりの堀にごり／＼と銃眼をうがつて、姿をかくして敵を撃てるやうにした。あそこへ敵がのぞいたら何百米、あの角なら何百米と、歩いて見て、正確な射撃の距離をはかつておいた。

これで大丈夫と一息ついてゐるところへ、三宅一等兵がにこ／＼しながら近づいて来て、

「ゆうべの鳩の巢がわかりました。あれです。」

と、指さした。

見れば屋根の下に巢箱がかけてある。

「かはい、子鳩が三羽もゐます。もう羽もはえそろつてゐますが、とても榮養不良のやうです。」

と言ふ。なるほどかうまで荒らされてゐては、親鳩がどんなに努力しても、餌が見つからないであらう。

「それでも、よく敵が鳩を食はずにおいて行つたものだね。」

「それです、私も不思議でなりません。よく生残つてゐたものです。かはい、やつです

よ。まあごらんなさい。」

かう言ひながら三宅一等兵は、「トゥ〜〜。」と口をならして、糧食の米をまいた。すると親鳩がひよいと飛びおりて来て、コツ〜と米をひろつた。子鳩も巢から首を出していかにも待ちきれなさうに、「クウ〜〜。」とさいそくがましく鳴いた。

「かはい、ものだ。支那の鳩でも親子の情にかはりはないね。」

「さうです、あれを見てみると、今、戦争をしてゐるなんて思へませんね。米がいくらもいるわけがありませんから、飼つてやりませう。」

「よろしい。だが豆がないのが氣の毒だな。」

私たちは、親鳩と子鳩の様子をあかすに眺めてゐた。

四

翌日の明方、敵が攻撃して来た。私たちはさあこいとばかり、銃眼によつて、一發々々ねらひうちにした。距離は前もつて計つてある上に、射撃は自慢の腕まへであるから、む

だ弾など一發もない。おもしろいやうに命中する。

しかし敵は多勢をたのんで、なか〜ひるますしつこく攻撃をつゞけて来る。

私たちのよつた土塀は、敵の機銃の射撃をうけて、ひつきりなしに土砂をはね飛ばした。

私たちは頭から砂ぼこりをかぶつて戦つた。私たちの銃は熱しきつて、手をふれると焼けつくやうな感じがした。弾はだん〜少くなつた。私は弾を制限してうつやうに命じた。

晝食をとるひまもなかつたが、べつに腹がすいたやうにも思はなかつた。

午後四時ごろになつて敵は機銃の射撃をやめて、迫撃砲をうつて来た。機銃の攻撃ではだめだとさつたらしい。

最初の砲弾は、ヒュル〜〜と風を切つて来て、すつと後の家屋にあたつた。「アハ、ハ：：」とをかしさうに笑つた兵がゐた。二度目の砲弾は、すつと手前に落ちて、河原の小石や砂を吹つ飛ばした。一門でうつてゐたのが二門になり、それから三門になつた。そしてねらひがだん〜正確になつて、砲弾が近くへ落ちだした。

私たちの身に危険がせまつた。もう笑つてはをられなくなつた。前面の土塀が、がらが

らとくづれて、二二三の兵がほこりと砲煙の中に倒れた。

「大丈夫か。」

私は駈けよつた。

「大丈夫です、なんのこれくらゐ。……」

「ひよろ／＼弾にやられてたまりますか。」

と、兵は負けをしみを言つてはね起きた。その時、敵はそのくづれ目のところへ、はげしく機銃弾をそゝぎかけて来た。

もう、この塀は役に立たなくなつた。この上は第二陣地によるほかはない。

「第二の防禦線へ。」

私はかう叫んで弾の下をくゞり、家屋の後にまはつた。

そのうちにだん／＼日が暮れて来たが、敵の砲撃はやまない。とう／＼私たちが寝起きしてゐる家屋の屋根へ、一時に三發も命中した。家屋の半分ぐらゐがきれいにくづれ落ちた。そしてその下から火がふき出して来た。

「しまつた。」

私たちは、齒ぎしりをして口惜しがつた。私たちの糧食も背囊も日用品も、すべてあの火の中にあるのである。私たちは、着のみ着のまゝで焼け出されてしまつたのである。

火は赤々と燃えて、あたりをすゞく照らした。私たちはどうにも手のくだしやうがなく、この混雑につけ入らうとする敵にむかつて射撃をつゞけてゐた。

その時、

「あゝ、鳩が！」

と、さげんだ者がある。

その聲にふりかへると、すさまじい火の粉の亂れ飛ぶ中を、ものぐるはしく飛びまはつてゐる二羽の鳩が見えた。鳩の巢も焼けるのである。かはいゝ子鳩は焼け死ぬるのである。親鳩はすさまじい火焰に羽のこげること忘れて、狂はんばかりに巢箱のあたりを飛びまはつてゐる。

それと見て、一人の兵が駈けだして行つた。そして火の粉をあびながら、靴で壁を蹴り



三郎
六七



六六

つけ、足がかりをつくつて、よちのぼらうとした。火に照らし出されたその姿は、敵の方から眞正面に見える。敵は機銃でねらひうつた。兵のまはりにぶすくと弾がめりこんで、ほこりが立つた。兵はどたりと落ちた。あつと思つたが、屈せず又おきなほつてのぼり出した。

「三宅、やめろ〜。」

「あぶない〜。」

私たちは、はら〜して聲をかけた。すると又一人の兵が駆けだした。今度のは木村といふ兵であつた。木村は壁の下にしやがんで、三宅を肩の上に立たせた、さうしてうんと腰をのばして立ちあがると、三宅の手がやつと巢箱にとどいた。巢箱は手早くはづされた。その時である、迫撃砲弾がすぐ上の屋根に命中して、家屋ががら〜とくづれ落ちた。二人はどつと投げ出された。

五

二人はふしぎにかすり傷一つしなかつた。三宅はしつかと巢箱をかへてかへつた。私

たちは前に敵のあるのもわすれ、二勇士の働きをほめそやした。

間もなく敵の射撃がやんだ。今朝からあれほど撃ちこんだにもかゝはらず、まだ一人も死なぬ日本兵の強さには、少し驚いたにちがひない。しかし彼等も負けたわけではないからこのまゝ引きさがるやうなことはない。私たちを四方からとりまいて、きびしく見はりの目を光らせてゐるのである。

鳩の巢箱は、安全な場所にかかけかへてやつた。朝になると、親鳩は昨夜の恐しかったことも忘れたかのやうに、空に輪を蒸がいて飛んだ。子鳩は「クウ〜」と巢箱から首をだして、餌をほしがつた。だが、今朝からは興へてやる米がなかつた。鳩ばかりでなく、持物全部を焼かれた私たちは、今日から、なに一つ口に入れる物がなくなつたのである。

私たちは細々と火を焚いて、湯をわかしてそれを飲んだ。一日二日とたつにつれて、焼けつくやうなひもじさに苦しめられた。誰の顔もだん〜色がなくなつて、くぼんだ目が奥の方で白く光るだけになつた。私たちはぬるい湯に指をひたして、チュウ〜とそれをすつた。指には土や垢がついてゐたから、湯だけ飲むよりは味があつた。おしまひには十

本の指が、先の方だけきれいになった。

鳩が飛びまはると、私たちはうらやましさに、それを見守つて、ほそくと話した。

「あれが傳書鳩だつたら、友軍に様子を知らせることも出来ようにね。」

「われくにもあんな羽がほしい。」

「鳩をむしつて、焼鳥にしたら、うまいだらうね。」

「おい、よせよ。鳩だつてわれくと同じにひもじがつて生きてゐるのだ。」

鳩の親子も元気がなくなつた。子鳩の鳴聲も心なしか弱つてきた。

しかし、私たちはありつたけの力をしぼり出して敵をにらんで暮した。親鳩は敵の上を飛んで行き、どこからか餌をさがしてやうやく子鳩を養つた。兵隊と鳩とはかうして飢ゑながらも生きてゐた

六

飢ゑるといふことほど恐ろしいことはない。私は子供の時、ある古井戸の中で二匹の蛙が

死んでゐたのを見た。この二匹は餌を食ひつくして、たがひに食ふか食はれるかの闘ひをした末、つひに共食ひしたと見えて、大きい方が小さい方を、半分くらゐ呑みこんでゐた。蛙のやうにおとなしい動物でも、飢ゑればこんなになるものかと、子供心にも身ぶるひをしたことがある。

しかし、私は今、私たちと共に飢ゑつゝ、生きてゐる親子の鳩を殺さうと思つた。私のこの行ひはその昔井戸の中で食ひあつた蛙どもの争ひにひとしいのである。けれども私は、少年の時のやうに身ぶるひをしてはをれなかつた。私には責任がある。分隊長として、大切な部下をむざく死なしてはならないのである。たとへ一時間でも二時間でも、生きられるだけは生きのびさせなくてはならぬ。死んではならぬ、生きてゐて、命せられた任務をあくまでもやりとげなくてはならぬ。そのためには、どんなむごたらしいことでもやつてのけなくてはならぬ。私はこのむごい行ひの責苦を、自分一人にうけて、井戸の中の大きい蛙にならうと決心した。そして、

(鳩よ。ゆるしてくれ)

と、心に念じつゝ、こつそりと巢箱の下にやつて来た。まきを壁かべに立てかけ踏臺ふみだいにし、そつとのび上つて巢箱の中へ手を入れた。

「クウ／＼／＼。」

鳩は恐しい魔まの手が襲せまひかゝるともしらず、體をくつつけ合つて鳴いた。私の手はふつぐらとしたやはらかな羽にさはつた。私の背すぢをなにかつめたいふるふるものがはしつた。とたんに、私は自分の子供の頬ほを思ひ出した。健康けんかうでまる／＼と太つた頬を思ひ出した。その頬にうすく生えてゐるうぶ毛げを思ひ出した。するともう、いくらなんでも、この鳩をつかみ出す氣になれなくなつた。しかし私はなほ一と思ひかへして、拳銃けんじゆうを巢箱の中に差しこみ一思ひに撃殺うちころさうとして、固かたく目をとちた。

その時、私の足に取りすがつた者がある。そして押しつけるやうな聲で、

「こんなことだらうと思つてをりました。お心もちはよくわかります。ほんとにありがたく思つてをります。だが、鳩を殺すことだけはやめて下さい。とにかく下りて下さい。下りてくださらないうちは手をはなしません。」

さういつて、むりやりに私を引きおろした。私はほつとした。とめてもらつたことが、ありがたかつた。何だか私自身が助けられたやうな氣がした。

「かういふ時には、生きてゐるものが多いほど力になります。この鳩が生きてゐるだけでも、どんなに心づよいか知れません。それに、この鳩を食つたところで、どれほどのきゝめがありません。そんなことよりか、もつと／＼他にやり方がありません。」

その兵隊——三宅みやけ一等兵は、一生けんめい私を説いた。

「他によい方法があるのか。」

「ありますとも、さあ、やりませう／＼。一せいに突つこんで、敵を蹴けちらしてしまふのです。あそこに食物はいくらでもあります。」

さういつてゐる時、他の兵もぞろ／＼と集つて来た。

「やりませう／＼。」と口々に言つた。

「やるか。」

私は思はず大きい聲をした。

「やります、この通りです。」
兵たちは力足を踏みしめて見せた。飢ゑてひよろ／＼するはずの兵の足が、力強く大地に音を立てた。

「悪かった。わたしの考へがまちがつてゐた。飢ゑてさもない考へをおこしたのだ。」

「そんなことがあるのですか。私どもの決心がついたのは、全くあなたのおかげです。」
三宅一等兵は、私にしがみついて言つた。

「やませう／＼。」
みんな私を中にして固くできあつた。

七

私たちは、明方になつて、不意をついて敵陣に斬込んだ。そして無我夢中で暴れまはつた。私の軍刀は何物かに當つて手ごたへがあつた。その度に敵の影が倒れたやうな気がした。

どれくらゐ戦つたか自分でもわからないが、何だか人影がだん／＼まばらになつたやうに感じた。出あふものの顔を見ると、みんな私の分隊の兵らしかつた。

私たちは、出ない声をふりしぼつて、戦友を呼びあつた。血をあびてもものすごい顔をしながら、みんなが無事に集つた。

「よかつた／＼。やつたぞ。」

と叫ぶその聲も、のどから思ふやうに出なかつた。その時、向かふの方におびたゞしい兵隊が見えた。その中で日の丸がヒラ／＼してゐる。友軍がたすけに来てくれたのである。それで敵は退却したのであつた。私たちはすつかり気がゆるんで、みんなその場へばた／＼とぶつ倒れた。

「よくやつてくれた。お前たちのおかげで、主力は大勝利を得たぞ。ありがたう／＼。よかつた／＼。」

と、私の手をにぎるものがあつた、それは中隊長にちがひないと思ひながら、私はだんだんわからなくなつてしまつた。



私たちは主力部隊に救はれて、間もなく元氣をとりもどした。するとみんな申し合はせたやうに、ひよろ／＼しながら、巢箱を見に行つた。鳩も元氣になつてゐた。親鳩はあせいよく空に輪をふがいて飛んでゐた。私たちが「トゥ／＼／＼。」と、口々に呼ぶと、さつと下りて来て、まいてやつた米をひろつた。巢箱の口から子鳩が、かはい、首を出して、「クウ／＼／＼。」と、待ちかねたやうに親鳩を呼んだ。

私たちは「アハ、ハ、ハ。」と、腹をゆすつて笑つた。

ルルーの首環

命あるうちに

私共戦線わたぐしぜんせんにをる者にとつて、何がたのしみだといつても、慰問袋むもんぶくろをあける時くらゐのたのしみは外にありません。

どんなものが出て来るかと、たゞもう胸むねを躍をどらせて、もどかしがりつゝ袋ふくろの紐ひもをとくのであります。中から出た物が、たとひどんなに貧しい物であつても、兵隊へいたいは決して失望しません。それには銃後じゆうごの人達ひとたちの眞心まごころが感じかんられるからです。「祖國そこくのため、苦勞くろうする兵隊さんのために。」といふ、あたゝかい心が通つてゐるからです。それだから私共は、それを身につけたり食たべたりする前には、必ずおしいたゞくことにきめてをります。

次にしるす話は、私共をひどく感激させた、慰問袋にまつはる物語です。私共は今一大決心のもとに徐州の攻撃準備中です。今度といふ今度は生きて歸られようとは思つてをりません。それだから、生きてゐてものが書ける中に、これだけは、せひみなさんに知らせておきたいと思ひ、いそいで書きつけます。

變な慰問袋

あの激戦だった台兒莊攻撃の一週間ばかり前の頃、第一線に慰問袋がくばられました。陣中にはいつせいにわきたちました。髭むしやな顔をした兵隊どもが、「わあーッ」と関の聲をあげるといふよろこびかたです。

「ほう。大當り。ドロップスが一罐はいつてるぞ。」

「煙草だ、煙草だ。パットが五箱も六箱もあるぞ。ほしい者は来て吸へ。煙草吸は集れ。」

「よし来た。」

「一本くれ。」



中野三郎

「俺にも一本。」

といふ大騒になつて、煙草好きの兵隊が押しよせたものだから、煙草をあてた上等兵は大まごつきです。

「これはえらい人氣だ。待て〜。さう押すな。一列に並んで順々に来い。一本づつ渡す。受取つたら官姓名を名乗れ。」

上等兵はもつたいをつけて一本づつ煙草をくばつてやりました。受取つた兵は、

「陸軍歩兵一等兵、何の何がし。」

と、自分の姓名を堂々と名乗つた上で押しいたゞく。

「こら、一人で二度も来る奴があるか。慾ばるな〜。」

こちらの方では、菓子を持つた兵隊へ甘黨の連中が蟻のやうに集つて来て、

「一つ、一つ。」

「俺にも一つ。運悪く俺には菓子がはいつてゐないよ。」

「おい〜、自分の袋を開けもしないで、人の物に手を出す奴があるか。この慾張り奴。」

「ハハハ……。やつぱり悪いことは出来ないものだ。しかし何でもよいからしやぶらせてくれ。」

「まあいゝから手を出せ、そのかはりいたゞいてたべるのだぞ。」

「有難い〜。」「わかつた〜。」

と、いつた工合で、たつた一本の煙草にも、たつた一個のキャラメルにも、銃後の國民の眞心をしのび、冗談めいて笑ひながらも、おしいたゞくのでありました。

軍用犬係の平岡上等兵は袋をもらふとすぐ犬のそばにやつて来て、

「さあ、東雲よ、お前にもおすそわけだよ。」

と、愛犬の頭を撫でて、袋の口をときにかゝりましたが、その袋の中には固い環のやうなものがはいつてゐるらしく、何だか手ざはりがへんでありました。

「はてな？」

上等兵は、首をかしげてつまぐつてみました。かしい東雲は上等兵の手もとを見ながら、「早く〜。」といふふうにしつぽをふりました。

綴方『ルルーの首環』

慰問袋の中から出て来たものは、見事な犬の首環と、小さい箱で、それに幼い筆つきの綴方と手紙が添へてありました。

「ほ、う、珍しいものはいつてゐるな。東雲よ、これはお前にうつてつけの贈物だよ。それにしても、をかした慰問袋だな。」

平岡上等兵は、まづ作文用紙をひろげて読み始めました。

それは、「ルルーの首環」といふ題で、尋三原修一郎といふのが、その作者でありました。

ルルーは、ジュビターの子で、僕達兄妹の仲よしでありました。一昨年さうなんの八月に生まれましたが、僕たちは子犬の時からはいがつてやりました。

ルルーはかしい犬ですから、僕や大咋のお辨當をもつて、學校へ来てくれることもありました。お辨當をすませて、「ルルー〜。」とよぶと、すぐに走つて来て、「坊ちや

ん、もうすんだですか。」といふやうな顔をして、お辨當箱をくはへ、それから大咋の分をとりに行きます。

大咋は、なか〜やんちやですからルルーをつかまへて相撲をとることがあります。ルルーはいつも負けましたが、これはわざと負けてやつたのだと僕は思ひます。登志子ちゃんもつと小さいから大咋よりもつとやんちやです。ある時ルルーがご飯をたべてゐたら、ごそ〜とはいつて行つて、ルルーのご飯をつかんでたべました。ルルーは、「僕のをたべてはだめだよ。」とでもいふふうには、登志子ちゃんの手をおしのけると、登志子ちゃんルルーの耳をつかんで、「ルル、ルル。」と叱りました。ルルーは困つたやうな顔をしてをりました。

支那事變が始つて、僕のお父さんは勇ましく出征されました。出征される時、「ルルーは役に立つ犬だから、お國のために軍犬班に差上げるやうに。」と、おつしやいました。それで聯隊の軍犬班に手紙を出すと、兵隊さんがつれに来て下さいました。お母さんはご馳走をこしらへてやつて、

「ルルー。うんとたべて、お國のためにお働きね。」と言つて、頭をなでてやられました。

ルルーは勇ましく出て行きました。僕たちは、「ルルー、萬歳。」と旗を振つてやりました。母犬のジュービターは、つれられで行くルルーを見送りながら、ちつとも泣きませんでした。それで僕たちはかはいさうだと言ひました。それから一月ほどたつて、ハワイの伯父さんから見事な首環を送つて來ました。ジュービターは、伯父さんの家からもらつたので、始めての子のルルーに、お祝として送つて下さつたのです。

けれども今はかけてやることが出來ません。ルルーは今どこで働いてゐるかわかりませんが、この首環をかけてやつたらどんなによろこぶだらうと思ふと、僕は残念でたまりません。

「なるほど、それがこの首環だな。どれ〜、この手紙の方には何が書いてあるだらう。」上等兵は、そのつゞきが見たくなつて、手紙をあげました。

白　い　花

この首環を受取つて下さる兵隊さんへ。

ルルーは戦死したさうです。太原といふ所の激戦で、手紙をはこぶ途中に、敵にうたれて死んでしまつたさうです。僕たちは残念で〜たまりません。けれどもルルーはりつぱに働いたさうです。弾が二発もあたつてゐたのに、一生懸命で味方の陣にたどりついて、それから死んだといふことです。僕たちはルルーが死んで悲しいけれども、りつぱに働いてくれたことはうれしいのです。

ハワイの伯父さんが送つて下さつた首環は、ルルーがかへつて來た時、首にかけてやらうと思つてしまつておきましたが、今はもうだめになつたので、兵隊さんへあげます。もしか兵隊さんが、ルルーのやうな犬を見られたら、これをかけてやつて下さい。この箱の中の花は、ルルーが軍犬班からいたゞいた花環の中の一つです。これもその犬につけてやつて下さい。

ルルーは死んでも、この首環をつけた犬が、ルルーのかはりに働いてくれれば、ルルーの魂はきつとよろこぶだらうと思ひます。

この手紙は僕が書きました。大昨といふ名は弟が書きました。登志子ちゃんはまだ小さくて字も何もわかりませんから、僕が書いてやりました。

兵隊さん、さやうなら。お國のために働いて下さい。

と書いて、おしまひに兄妹三人の名前がならべてありました。

上等兵は思はず涙を落して、

「なんといふやさしい心の兄妹だらう。それにしてもこの慰問袋が、自分にあたつたといふのはよく／＼不思議な縁だ。いや／＼、これはきつとルルーの魂が、あててくれたのにらがひない。」

と、つぶやきながら、小箱の中から白いバラの花を出して、それを首環にしつかとく／＼つけました。

「東雲よ。これからは、お前はルルーの分まで働くのだよ。」

さう言ひながら花の首環をかけてやりました。

台兒莊攻撃の準備がなつて、人も馬も犬もはりきつて命令が下るのを待つてをりました。

戦の野にも春が来て、うす緑に芽ぐんだ白楊の枝には、ゆら／＼とかげろふがなびき、青くけむつた空には、爪でかすつたやうな晝の月が、かすかに細くか／＼つてをりました。

包圍の中に

いよいよ戦が始まりました。

平岡上等兵は東雲をつれて、特別任務をうけた決死隊に加はり、敵第一線の右翼方面に進んで行きました。さうして激しく攻撃し、敵がその方に氣をとられてゐる間に、隊の主力は正面から攻めかゝり、一舉に打破る作戦でありました。

本隊を離れてから三日目の夕方、突如行手にあたつて銃聲が起り、弾が風をきつて飛ん

できました。

「いよ〜。ぶつかつたぞ。」

決死隊は、ぱつと散開して、たちまち戦闘隊形をとりました。

敵の弾はだん〜激しくなつてきました。その中にまじつて、

「ビュル〜〜。」

と、無気味なうなり聲を立てて飛んで来る弾がありました。これは支那軍自慢の迫撃砲であります。

決死隊はもとより覺悟の前ですから、びくともせず應戦しました。敵が多く来れば来るだけよいわけですが、敵もぼんやり攻めてゐるはずがなく、だん〜包圍のかたちをと、のへてきました。

かうなると、前も敵、後も敵、決死隊は十字砲火の中にさらされることになりました。

しかし決死隊長は一向驚きません。

「敵が多く来れば来るだけ、それだけ友軍の攻撃が樂になるのだ。見よ、前にも後にもお

びたゞしい敵だ。わが軍の作戦は正しくあつたのだ。この上は最後の一人になるまで戦へ。最後まで敵を引きつけて一人たりともはなすな。」

と、部下をはげまして、壕を掘らせ、その中にたてこもつて二日間戦ひました。しかし、残念なことには弾薬がなくなつてきました。

屍を戰場にさらすことは、もとより軍人の本望であり、ことに決死隊としては始から覺悟の上であります。この任務を完全になしとげるまでは、むざ〜と死んではなりません。石にかじりついても生きてゐなくてはなりません。

「あゝ、弾薬がほしい。たべものもいらぬ、何もいらぬ、たゞ弾薬がほしい。」

隊長は友軍部隊長へあて、「援軍もいらぬ、何もいらぬ、たゞ弾薬をたのむ。」と書き、平岡上等兵へ渡しました。上等兵はそれを東雲の通信袋へ入れて、じつと頭を抱き、

「東雲よ、決死隊の運命も、軍の運命も、お前の働き一つにかゝつてゐるのだぞ。この首環のことを忘れるな。」

と、言つてきかせ、



21
野田川



22

東雲の頭を友軍のある方角へ向けて、

「よし、行け。」

と、命令しました。

東雲はさつと壕を躍り出て、弾の中をまつしぐらに駆け出しました。

東雲の奮戦

一散に走つていく東雲を見つけた敵は、それ逃がすなとばかり弾をあびせかけました。

東雲の前後左右には、絶え間なく、バツ、バツと砂煙がたちました。

決死隊は手に汗をにぎりつ、東雲の無事を祈りました。

しかし、もう一息で敵陣をつきぬけるといふ刹那、東雲はばつたりと倒れました。

「しまった。」

さう叫んでみんな立上りました。

四五人の敵兵は、手に――銃剣をかざして、東雲に近よつて行きました。多分袋の中の

通信文を奪ひとるつもりでせう。こちらではそれを見てゐながら、弾丸がつきはてた今はどうすることも出来ず、無念のはがみをして口惜しがるばかりです。しかし、いよく敵兵が近寄つた時、東雲は立上つて、猛然と躍りかゝりました。

先頭の敵は銃を放り出して、のけぞりました。

「やつたぞ。」

「東雲、しつかり。」

味方の陣地から、どつと歓聲があがりました。その聲に送られて、利口な東雲はまつしぐらに駆け去つてしまひました。

「偉いやつだ。」

「この分なら、弾薬が届くぞ。」

「がんばれ。東雲に負けるな。」

東雲の奮戦は、勇士達に希望と勇気を與へました。

敵味方睨みあひの中にその日が暮れました。しかし、待ちに待つ東雲のたよりはなかな

かありません。もし東雲が途中でたふれたら、決死隊の運命は風前の灯です。全滅はもとより覚悟の前であるが、出来ることならこの任務をなすとげた上で死にたい。」

「東雲たのむ。」

「この任務をはたさせてくれ。」

この必死の願はつひに達せられました。東雲を先頭に十数匹の軍犬は、それ／＼弾薬の箱を背負つて、闇の中から勇ましい姿を現しました。嚴重な敵の警戒をくぐるため、日頃の訓練をそのまゝ生かし、どの犬もみな腹ばひになつて、すり／＼とはつてやつて來ました。無事に任務をはたして、うれし氣に尾をふる軍犬をうちかこみ、さすがの勇士たちも、しばらくは口もきけませんでした。

平岡上等兵は、東雲の首を抱いてゐるうちに、とう／＼泣いてしまひました。

「東雲よ。よくやつてくれた。お前はわれ／＼の命の親だ。どこかでルルーもよろこんでゐるよ。」

これだけの弾丸があればもう大丈夫です。「さあ來い。」と勇み立つ勇士達の頭上に、春

の星が美しく光つてをりました。

台兒莊攻撃の花

平岡上等兵は、台兒莊占領の後、三人の兄妹へあてて手紙を書きました。

修一郎君

大柞君

そして小さい登志子ちゃん。

ルルーの首環は、たしかにいたゞきました。私はみなさんのやさしい思ひやりの心と、そして、お國のためを思ふ眞心に泣きました。

東雲といふ犬はかしい犬です。この犬はルルーの首環をかけて、勇ましい働きをしました。そのために私達の隊は救はれて、そして台兒莊を占領することが出來ました。

みなさんもよろこんで下さい。なくなつたルルーも、きつと、よろこんでくれるでせう。あの首環があつたために東雲はなくなる命を助りました。あの首環が弾丸をはじき飛ばしてくれたのです。これはルルーが東雲を守つてくれたのだと思ひます。

さうして、上等兵は一番おしまひに、次のやうに書きそへました。

台兒莊攻撃の花、——それはもの言はぬ東雲です。そして、首環とそれにつけたあの白い一輪の花です。しかし、もつとよく考へてみれば、それはみなさんの心に咲いたやさしい真心の花です。

内地の風

一

負傷して送られてくる兵隊に出合ふと、彼等は無念の齒がみをして、『徐州を見ずにやられては残念だ。たのみます。徐州をたのみます。』

と、手の動かせる者は手をあげ、手をやられてゐる者は首をもたげて、トラックの上や擔架の上から、前進する私たちへ呼びかけました。

私たちは列を離れて彼等のそばへより、

「徐州は引き上げた、安心して早くよくなつてくれ、咽喉がかわきはしないか。かわいてをるなら水をやらうか。煙草がほしければ煙草をやらうか。」

と、いたはつたりはげましたりしました。

「何もいらん。みんなもつていつてくれ。それよりもたのむ。徐州をたのむ。」

「大丈夫。引きうけた。」

私たちは、傷ついた不幸な戦友に固く誓つて前進しました。

さうして、私たちの隊も敵とぶつつかつて戦ひ、じり／＼と徐州にせまつて行きました。が、戦ひのたびにいくたの犠牲者を出しました。彼等は、私たちと別れて後方へさがるとき、

「徐州を見ずにやられては残念だ。たのみます。徐州をたのみます。」

と、涙をたゝへながら、私たちの手を握りました。私たちはその手を握りかへして、

「よし、引きうけた。僕等は君たちの分をも働いて、とも／＼に徐州へ日章旗をたてる。と、誓つて、なほも前進をつゞけました。」

二

大陸の五月は、内地の眞夏のやうに暑くて、じり／＼と照りつける太陽は、全身からありつた汗をしばらくつくすかと思はれました。灰をかきたてたやうな埃と汗とくつついて、顔も手もさら／＼にひからびました。

私たちは、休止の時には暑い日を木かげにさけて、棒のやうにすくんだ足を、投出してぶつ倒れました。このつかれた體では、ふたゝび起きあがれさうにも思はれません。さういふ時、私たちは、

「おい、内地の風をくれ。」

と、言ひました。

「内地の風」といふのは、私の隊の石川一等兵がもつてゐる扇のことです。ある時、四五人の兵隊が顔をならべて、石川に煽つてもらつてゐました。そして口々に、

「涼しいな。」

「内地の風は涼しいな。」

と、はしやぎながら涙ぐんでゐました。私はへんに思つていつて見ると、その扇に「内地の風」とお清書のやうに書き、その左に小さく「尋六、勝田妙子」と書いてありました。もとより、「内地の風」と書いたくらゐで、涼しくなる道理がありません。けれども私たちは、この少女のやさしい心づかひにうたれました。暑い戦地で働く兵隊さんへ、内地の

涼しい風を送つてあげたいといふいちらしい心が、この扇にこもつてをりました。それだから兵隊は、大陸の暑い風を本當に涼しく感じ、その風から、内地の青い葉や岩清水の匂を感じました。そして涼しいすだれ越しにひびく風鈴の音をさへ聞きました。

それからといふものは、私たちは、この扇をかりて、内地の風を起しました。すると、棒のやうにすくんだ足がひとりでに動きだして、

「徐州へ、徐州へ。」

と、前進をつゞけさせました。

「捨ててはいかんぞ。大切に持つていくのだぞ。」

私たちは、大切な寶物か何かのやうに、幾度も石川に念を押しました。デパートなどを通じて送つてくる慰問袋の、どんなに立派な扇よりも、この少女の扇がどれだけありがたかつたか知れません。品そのものよりも、そのいちらしい心を、兵隊は寶物のやうに思ひました。

三



第三回

かうして徐州をさして前進をつづけてゐるうちに、雨がふり始めました。ちやうど内地の梅雨のやうに、毎日々々はげしく降りつづきました。

晴天の時には灰にうづもつたやうな道が、たちまち泥沼のやうになりました。私たちは天幕を頭からかぶつて、はげしい雨をふせぎつゝ、泥まみれになつて前進しました。

その中で、たゞ一人だけ天幕をかぶらぬ兵隊がゐりました。これは隊の當番の兵隊ですが、彼は、私たちが故郷へ出す手紙を集めて大きい束にし、それを天幕でつゝんで背囊の上のせ、自分はびしよぬれになつて歩いてをりました。この手紙は、後へ引きかへすトラックを見つけて、野戦郵便局へ出してもらふつもりであります。そんなよい便がなかなか見つかりません。

ところが、あるクリークの橋を渡るとき、運悪く天幕の結び目がほどけて、手紙の束が落ち、濁流に押されて流れ出しました。當番の兵隊は驚いて川の中へ飛びこみ、乳のあたりまで水につかつて手紙を追ひかけました。私は、

「そんな物はおいて行け。早くあがれ〜。」

と、言ひましたが、兵隊は見向きもしないで追ひかけました。それを見た四五人の兵隊は、岸づたひに走つて行つて川へ飛びこみ、みんなで手紙をとつて來ました。

雨にうたれてぬかるみの中を行軍するのは、一通りの苦勞ではありません。荷物になるものはすべて捨てていきたいのにもかゝはらず、兵隊は手紙の束を大切にになつて前進をつづけました。

さうしてゐるうちに長い雨がはれて、また暑い日が照り始めました。休止になると兵隊は手紙の束をほどいて、乾かし出しました。私は、つくづく感じ入つて、

「なか〜たいへんだね。しかし、内地の者はたよりを待つてゐるだらうからね。」

と、いふと、兵隊はにつこり笑つて、

「他の手紙はともかく、これだけは届けたいと思ひましてね。」

と、いつて示したのを見ると、どの宛名も「勝田妙子様」と書いてありました。

「あゝ、さうだつたか。」

私は、まだ禮状をしたゝめなかつた自分を恥ぢて、この次にはきつと書かうと思ひま

した。

四

私たちは、徐州へ入城して、途中で倒れた戦友との約束を果しました。そして、

「城門にひるがへる日章旗を見てくれ。私たちにこの旗をたてさせたのは君たちだよ。」

と、心の中で呼びかけました。

しかし、石川一等兵がつかつてゐる扇を見た時、私は、もう一つ大切なことを忘れてゐるのに気がつきました。私は先のまるい鉛筆をなめて、

「あなたの送つてくれた内地の風は、私たちをどんなに涼しくしてくれたか知れません。」

おかげで私たちは徐州を占領しました。よく考へてみると、今、城頭の日章旗をはためかせてゐるのも、あなたのやさしくてけだかい心の風です。」と、書き、宛名を「勝田妙子様」とした、めしました。

親子の軍馬

一

南村一等兵の愛馬「鈴鹿」が、お産をするといふので、主人の一等兵はもちろん、部隊全員がいつか〜と、たのしみに待つてをりました。

一等兵は厩からすこしもはなれないで、「鈴鹿」をいたはつてやりました。かひばをやることから、ほどよい運動をさせることから、敷藁をとりかへることから、まつたく寢食をわすれて、こま〜と氣をつけてをりました。それで一等兵は、いつの間にかみんなから「お産婆さん。」とよばれるやうになりました。

部隊の兵隊たちも、一日に幾度となく「鈴鹿」を見に来て、「まだか〜。」と、さいそ

くがましく言ひました。部隊長も氣にかゝるらしく、たび／＼のぞきに來て、

「よい子をうませてくれ、なるべく早いうちにね。」

と、にこ／＼して言はれました。

それは、ちやうど山西省の五臺山攻撃が始る前であつたから、どうかしてそれまでにお産をすませせたかつたのでありました。

かうして待ちに待つたかひがあつて、「鈴鹿」は、やす／＼とお産をしました。「それうま

れた。」といふので、兵隊たちは、どつとおしよせて見に來ました。

「いけない／＼。そんなさわぎをして、もしも鈴鹿の氣持がたかぶつたらどうするのだ。」

南村一等兵は、厩の入口に立ちはだかつて、兵隊たちをおしもどしました。

「そら叱られた、しづかに／＼。しづかにしないと鈴鹿のかんがたかぶるとよ。お産婆さんのお言ひつけど。」

「おい／＼。さうもつたいぶらないで、一目くらは見せてくれ。なんだ、南村一人の馬ではあるまいし、よくばるな／＼。」

兵隊たちは少しでも早く見たがつて、わい／＼ひしめきあひました。一等兵はしかたなく、

「それほど見たければ見せてやろう。だが一人づつ、しづかに入るのだよ。」

と、うすぐらくした厩の中へ、一人づつかはり／＼に入れてやりました。

「なるほどかはい、子馬だ。耳がびんとはつてゐるから、こいつはすばらしい馬になるぞ。」

「足もすつきりとのび／＼してゐるから、大きくなつたら、騎兵隊の乗馬だな。」

と、感心して口々にほめそやしました。南村一等兵は、まるでわが子でもほめられたやうに、顔一ぱいゑみをたゝへて、

「部隊長もさう言はれた。名前をつけてやるとおつしやつた。どうだ、みんな。よい子だらうが。」

と、そり身になつてじまんしました。

「南村のやつ、まるで自分がうんだやうな氣で、いばつてゐるぞ。」

「だうりで、鼻がだん／＼高くなつた。」

と、みんなはうらやましさにひやかしました。

「へん、うらやめ／＼。」

と、一等兵は、鼻の上にこぶしを二つかさねて、一そうそりかへりました。

二

部隊長は、この子馬に「源太」といふ名をつけられました。南村一等兵の名前の源太郎の二字をとり、そのむかしの熊谷次郎直實の愛馬「源太栗毛」にあやかつて、名馬になれといふのでありました。

十二三日たつと、南村一等兵は「源太」を廣場へつれ出して、そろ／＼運動させることにしました。

「源太」は、始めて見る世の中が、なにかもめづらしいらしく、さとくて清らかにすんだ目を一ぱいに見はり、蘆の若芽のやうなかはい、耳をびんと立てて、ちよつとした物

音にもびつくりし、はねあがるのでありました。

「こいつ、臆病ものめ。」

一等兵は、口では叱りながら、ほく／＼して見とれてしまふのでありました。

「源太」が歩くと、まだ小さくてやはらかな蹄が、ぼこ／＼とかはい、音をたてました。

しかしまだなんだかあぶなつかしい足どりで、小さい石ころにさへつまづき、びつくりしてはね上り、それに又おどろいて、いきなりとつとかけ出したりしました。

「走る／＼。源太が走つてゐるぞ。」

それを見つけた兵隊たちは、わい／＼と見物におしかけました。「源太」はあまりの大人數におどろいて、「鈴鹿」のところへかけてかへり、その體のかげにかくれて、臆病さうな目つきをしてこちらをふりかへるのでありました。これが人であつたら、

「お母ちゃん、たくさん人が来たから、ボクこはい。」

とでも、つげるところでありませう。すると「鈴鹿」は、

「何だね源太、ちつともこはいことはないよ。兵隊さんはみな親切で、だれもかはいがつ

て下さるのだからね。男の子が、そんなに気がよわくてどうします。さあ〜元氣を出してあそんでいらつしやい。」

とでも、さすとすところでありませう。何か言ひたげにその長い顔を「源太」の方へすりよせるのでありました。すると「源太」はいかにもあまえるやうに、自分も顔をその方へよせてこすりつけ、うれしくてじつとしてをられぬといふふうに、足をそろへてびよこびよんこと、はね上つてみせました。

「馬でも親子の情つて深いものだね。」

「なんだか、お母さんに手紙が書きたくなつたよ。」

兵隊たちは、それを見ながらしみじみとこんな話をするのでありました。かうして「源太」は、部隊中で一番の人氣者になりました。兵隊たちは、なにか氣もちのくさくさする時でも、「源太」を見に来ると、ふしぎに心がやはらいできました。

かうして「源太」はいつか兵隊たちにとつて、なくてはならぬものになりました。それだから、



「南村だけにまかせてはおけない。みんなで源太をりつばな馬にそだてよう。」
と、だれもが、力こぶを入れるやうになりました。

三

かうしてゐる中に、五臺山の攻圍戦が始り、この部隊もそれにくははつて、山また山のけはしい路をすゝみました。馬は背に兵糧や弾薬をつけ、兵は馬をいたはり助けつつ、兵と馬とが一體になつて、苦しい行軍をつゞけました。

出發の時、部隊長は、

「源太をつれて行つても手がかゝるから、このあたりにあづけて行かう。」
と言はれました。

兵隊たちは、これを聞いて、がっかりしました。しかし部隊長の命令であるから、やむなく「源太」をのこして行くことにしました。

南村一等兵は、しを〜と「鈴鹿」の手綱をとつて、ひき出さうとしました。すると、

いつもおとなしい「鈴鹿」が、今日はどうしても動かうとしません。むりはないと同情しつつ、聲をあげましてしかりつけると、「鈴鹿」はかなしげにないて、「源太」の方をふりかへりました。「源太」もかなしげにないて、あばれました。

それを見てをられた部隊長は、

「かはいさうだ。やくかいでも源太をつれて行つてやれ。」
と、言はれました。

「は。」

南村一等兵のその返事の早かつたこと、「しめた。」とばかり、大いそぎで「源太」をつれて來ました。

「源太」は、荷物をせおつた「鈴鹿」とならんで、元氣よくあるきました。道がけはしくて、人も馬もあへぎ〜手間をとつてゐると、「源太」はとつと先の方までかけて行き、得意げにあとをふりむいて見ました。そして、もどかしさうに又かけてかへつて來るのでありました。

始めは「源太」をつれて來ることを、すこし心配してゐた兵隊たちも、この様子を見てすつかり安心し、今ではかへつて「源太」にはげまされてゐるやうなものでありました。

「源太に笑はれるぞ。しつかりしろ。もうひといきだ。」

手綱をとつた兵隊たちは、さう言つては、じぶんの愛馬をはげましました。

かうして、行軍を五日ばかりつゞけて、部隊は小さい町へつきました。こゝは、二日前まで、敵の前線司令部があつたのですが、正面の大きい道の方ばかりに氣をとられてゐる中に、作戦のうまい我が軍に思ひがけなく裏の山から攻めよせられて、ひとたまりもなくにげてしまつたのでした。

その晩、「源太」たちの部隊は、町から少しはなれた部落に泊りました。本道をすゝんできた戦車隊や自動車隊は、町の中に宿營してをりました。

明日はにげる敵を追つて、各隊が一しよになつて、本道上を追撃して行くことになりました。その夜のあわたしい夢にかよふものは、故郷のことでもなく、妻子のことでもなく、たゞ痛快な追撃戦のいさましい場面でありました。

しかし、この夢はとつせんおこつた銃聲にやぶられました。兵隊はむつくり起きあがつて、銃をとりました。

「敵襲。」

それは、にげちつた敗残兵が食糧ほしさに、この部隊におそひかゝつて來たのでありました。

四

敵も、なか／＼戦ひのやり方を知つてゐて、まづ馬をつないであるところをねらつて、闇の中からさかんにうちかけてきました。

かういふ輸送部隊にとつては、馬はなによりも大切な「兵器」である上に、射撃をうけた馬共がいつせいに狂ひたつと、とりとめのつかない大さわぎになる事があるものです。

敵はうまくねらつてつけこんで來ましたが、こちらでも、たやすくその手にのるやうなことはありません。かねてかういふことがあるのは覺悟の前ですから、めつたに弾のとゞ

かないやうなところに馬をつなぎ、そして敵をふせぐに都合のよい陣地がつくつてありました。

「それ。」

とばかり、すぐその陣地について、間近にせまつた敵の銃火を目がけて弾をあびせかけ、ひるむところへ、どつとつこんで行つて、一氣に追ひはらつてしまひました。敵はあわてふためいて、たちまち闇の中へきえさつて行きました。

「人さわがせな敵だ。夜中に起すほどなら、もつとしつかりやつてくればよいのに。」

眠いところを起された兵は、敵の不甲斐なさをぶつ／＼こぼしながら、それ／＼愛馬を見舞つてやりました。

いくら敗残兵でも、うつ弾に變りはないのですから、まともにくつてはたまりません。

南村一等兵は、なんだか胸さわぎがして「鈴鹿」のそばへやつて来て見ると、いたましくも「鈴鹿」は横に倒れてをりました。

「あゝ、鈴鹿。」

一等兵はびつくりして飛びかゝり、起きあがらうとしてもがいてゐる「鈴鹿」の手綱をとつて、助けおこさうとしました。「鈴鹿」はそれに力を得て、前足だけは立てましたが、後足をやられてゐるので、すぐに又どうと倒れてしまひました。

「鈴鹿、鈴鹿、傷はあさいぞ。しつかりしてくれ、敗残兵ごときものの弾をくつて、へたばつてしまふやうなお前ではあるまい。源太が心配してゐるよ。鈴鹿、鈴鹿、もう一度おきてくれ。」

南村一等兵は、いそいで傷口をあらひ、そこをしつかとしばつてやりました。「源太」はそばにしゃんぼりと立つて見てをりましたが、母馬の苦しみがわかるものらしく、心配さうに口をよせて、「鈴鹿」の顔にこすりつけました。すると「鈴鹿」は苦しさをこらへて、じつと子馬のいたはりをうけてやりました。

「たまらないな、あれを見ては——何とかしてやれないものだらうか。」

親子の愛情のあはれさに、だれも胸をかきむしられるやうな気がしました。

五

翌朝は、くらしいうちに出發です。

南村一等兵は、すこしもねむらないで「鈴鹿」につききつてゐましたが、「鈴鹿」の傷は重くて、つれて行く見込がないのみか、たとひ傷はなほつても、再び物の用にたつとも思はれません。これまで苦樂を共にしてきた愛馬に、こゝでかうして、わかれなければならぬかと思ふと、一等兵の胸は、かなしさにはりさけるばかりでありましたが、今はしかたなくすてて行くより他はありませんでした。

ところが、一等兵をもつと悲しませたことは、「源太」がどうしても「鈴鹿」のそばをばなれないことでした。一等兵は「源太」の首をかゝへて、

「源太よ、鈴鹿のことはあきらめてくれ。つらいだらうがお前だつて日本の馬だ。この上おれたちを困らせないで一しよに行つてくれ、なあ源太、わかつたね。」

と言ひきかせて引きださうとしましたが、「源太」はかたくなに、どうしても動かうとし

ません。

「源太、源太。」

一等兵は涙聲で手綱をひつぱりました。

それを見てゐた自動車隊が、

「それは、いくら引つばつてもだめだよ。むごいやうだが、その子馬をしばつてトラックへ乗せるがい。こちらの隊ではこんでやらう。」

と、しんせつに言つてくれました。

まつたくそれよりほかに方法がないので、みんなであれくるふ「源太」をしばり、かつぎあげてトラックに乗せました。

トラックが動きだすと、「源太」は悲しい聲をはりあげてなきました。鈴鹿はその聲をきくと、きつと首をもたげて、これも悲しい聲でなきました。そしてもうくと立ちあがる砂煙のあなたへ、しだいに遠ざかる子馬と、あとにのこされた親馬とは、たがひに聲がなきかれるまで、よびかはしました。

南村一等兵は、ながく苦しませるのは、かへつてかはいさうだと思ひ、「鈴鹿」を銃殺する覺悟をきめてねらひをつけました。しかし、首をもたげてわが子を見おくる、あはれな「母馬」の額に、鬼でないかぎり、どうして無情に引きがねがひかれませう。一等兵はたまらなくなつて、

「鈴鹿よ、こゝへかうしてお前を捨てて行くのは、たまらなく悲しいことだ。無情のやうだがお國のためと思つて許してくれ、その代り源太はかならず、りつばに育ててみせるぞ、それだけは安心してくれ。だが、お前も生きてゐられる限りは生きてくれ、生きてさへをれば、又きつとあへる時もあるよ。お前に母の強い愛情があるなら、きつと生きてゐて、りつばになつた源太を見てくれるのだぞ。わかつたか、それでは鈴鹿大事にしろよ。」

と、首をなで／＼やさしく言ひきかせ、いそいで部隊のあとをおひました。鈴鹿はもう首をもたげる力もなくなつたのか、ぐつたりとして、腹を大きく波うたせてゐるばかりでありました。一等兵は、うしろをふりかへり／＼、泣きながらかけて行きました。

六

壯烈をきはめた五臺山の包圍戦。

山西省の治安をかきみださうとして、執念ぶかくがんばつた共産軍の根據地も、皇軍の潮のやうな進撃の前には、ひとたまりもなくおしくづされて、日章旗は五臺山の峯にひるがへりました。

このかゞやく勝利のかげには、このやうな兵と馬とのなみだぐましい事實が、いくつとなく織りこまれてをりました。

南村一等兵たちの部隊は、五臺山附近にとゞまつて、しばらくの間休養をとり、さらに次の戦闘のために準備をしてをりました。

その間にも「源太」は見る／＼成長して來ました。足もすく／＼とのび、毛なみもつやつやとして、あれから三箇月たつたばかりなのに、見ちがへるほどりつばになつてゐました。南村一等兵がどんなにいたはりそだててきたかは、一目見ただけでよくわかるのであ

りました。

この部隊とおなじところにとどまつてゐた騎兵隊の兵隊たちも、「源太」を見て感心し、「これは大した馬になるよ。りつばな乗馬だ。」

と、ほめてくれ、今のうちから訓練した方がよいから、こちらへ時々つれて来てはどうかと言つてくれました。南村一等兵も、乗馬といふことになれば、それ専門の騎兵にしこんでもらつた方がよいと考へて、暇の時には騎兵隊へ見學につれて行きました。

「源太」は、かうしてどの部隊からもどの兵隊からも、かはいがられて仕合せにそだちました。

さうしたある日、近くの部落へ匪賊が出ました。土民は早く退治して下さいと、息せききつてかけこみました。本部はいろめきたつて命令を出しました。

「騎兵隊はこれを討伐せよ。」

時をうつさず、十騎ばかりの騎兵がくつわをならべて出動しました。ちやうどその折、騎兵隊に来てゐた「源太」も、そのあとについて勇んでかけ出して行きました。

『いよ／＼源太の初陣だ、かう言ふとなんだか昔の戦みたやうに聞えるな。』

南村一等兵は、それを見おくりながら、うれしさうな、また心配さうな顔をしてつぶやきました。

七

めざす部落に近づいた騎兵隊は、ひらり／＼と馬からおり、小高い丘にのぼつて敵の様子をうかがひました。

部落は、すぐ目の下に見え、女子供が泣きさげびながら、あちらこちらへ、にげまどふ様子が手にとるやうに見えました。それを、所々に立つた見張りらしい匪賊が、銃剣をかまへておどしつけてをりました。家の中では今掠奪の最中と思はれました。あはれな支那の良民は、まもつてくれるはずの兵隊から、かうして財産も命もうばひとられるのです。騎兵隊はわがことのやうに怒りました。

『にくい匪賊共だ。あはれな良民をすくつてやれ。』

たちまちとどろく銃聲のもとに、見張りの匪賊は、ばた／＼と倒れました。

「見てをれ、家の中で掠奪に夢中になつてゐる奴が、今におどろいて出て来るぞ。そこをねらつてやつつけるのだ。」

と、待ちかまへてゐる銃先へ、日本軍の襲撃と知つた匪賊が、おどろきあわてて飛び出しました。

「それ、注文どほりだ、うて／＼。」

弾をあびせかけられた匪賊は、びつくり仰天して手むかふどころか、せつかくうばひとつた物まで打捨てて馬に飛び乗つてにげ出しました。

これくらゐおもしろい戦はありません。

「追撃。追撃。」

と、人も馬もはすみきつて追つかけてました。「源太」もその後についてかけ出しました。

匪賊はせまい山道を、おしあひへしあひ、われ先にもみ合つて逃げるものですから、馬からおちるもの、馬もろとも谷間へ飛込むもの、全く目もあてられぬうろたへぶりです。

騎兵隊は、それを蹄にふみにじつて追撃しました。

と、とつせん、今まで後についてかけてゐた「源太」が、まるで矢のやうにぐん／＼かけぬけて先頭へ立ちました。そして首をのばして高々といな／＼きました。すると、にげて行く匪賊の馬の中から、それに答へるやうな、いな／＼きが起りました。

「おや。」

と、思ふまもなく、今までまつ先をかけてゐた馬が、くるりと向きなほり、すさまじいいきほひで、こちらへかけもどつて來ました。乗つてゐた隊長らしい匪賊は、あわててそりかへり、手綱をひきしぼつて向きをかへようとしたが、馬は氣でもちがつたやうにはねあがり、あばれまはつて、どん／＼かけもどりました。鬼よりも恐しい日本軍の方へいやでもつれてこられる匪賊の顔のをかしさ——。そのうちに彼は氣をうしなつたのか。それとも馬にふりおとされたのか、どうと落馬して、それなり『うん。』とのびてしまひました。「源太」とその馬は、かけよつて、なつかしさうに顔と顔をこすり合はせましたが、やゝあつて二匹とも、空にむかつてうれしげにいな／＼きました。



三三
三三



三三

騎兵隊は、あまりのふしぎな出来ごとにあきれて、敵を追ふこともわすれたかのやうに、このありさまを見まもるのでありました、言ふまでもなく、敵の隊長を乗せてゐたのは、三月前にきすついで捨てられた「鈴鹿」だつたのです。

騎兵隊は、のびた敵の隊長を始め五六人の捕虜を引つたてて、意氣揚々と引きあげて來ました。ふしぎなところでめぐりあつた親子の馬は、ひさしぶりにうちつれて、仲むつまじくかへつて來ました。

八

「鈴鹿」のすがたを見た時の、南村一等兵たちのよろこびはこゝで言ふまでもありません。

「よかつた〜」。鈴鹿も源太もよかつた〜。」

一等兵は、兩方の馬のくびにだきついて涙をぼろ〜こぼしました。

ほかの兵隊たちも、騎兵隊から、匪賊の隊長を生捕つたことを聞いて痛快がつたり、馬

ながらも、親子の愛情のふかさに心をうたれて、

「よかつた〜。」とわがことのやうに、よろこびあつたりしました。

それにしても、「鈴鹿」がどうして敵の中にゐたか、そして、あれだけの傷がどうしてなほつたかと、みんなふしぎがりました。後足をしらべて見ると、傷のあとはこのこつてゐましたが、すつかりよくなつて、これなら走るのにも車を引くのにもさしつかへありません。これはきつと、かはい、「源太」にあひたい母馬の一心が、あの重い傷をなほしたのにちがひない、そして「源太」をさがしもとめて、さまよつてゐるうちに、匪賊につかまり、その乗馬にされたのであらうとみんなで話しあひました。それにしても母の愛のつよさよ。それは源實朝の歌の「もの言はぬ四方のけだものすらだにも、あはれなるかなや親の子を思ふ」そのまゝでありました。親の深い愛情が今更のやうに、しみ〜とみんなの胸をうちました。

「それにしても、たつた一聲で、よくもたがひにわかつたものだね。」

「それは親子だもの、ましてあゝいふわかれをした時の悲しい聲は、いつまでも耳にこび

りついてゐただらうよ。』

『なんにしてもめでたいことだ。見ろ、源太があんなに大きいなりをして、まだ乳をさがしてゐるよ。』

『ひさしぶりで、オツバイちやうだいといふところだね。』

兵隊たちはさういつて笑ひながら、何故となくなみだぐみました。

『源太』は、『鈴鹿』の腹の下に、ぐい／＼と口をこすりつけてゐましたが、べつに乳をのまうとはせず、さつと身をひるがへしてとつとかけ出し、又くると向きをかへて立ちどまつて耳をピンと立てました。それは心がはずんで／＼たまらないといふやうでありました。

『鈴鹿』は、幸福さうにそれを見てをりました。

興亞の晴衣

—

トラック隊は、ものすごい黄塵をあげて走りました。土がぼ／＼に乾いて、灰のやうにもつた道を、何十臺といふトラック群が走るのですから、もう／＼と舞ひあがる黄塵は、先頭から後尾までをすつかり蔽うて、遠くから見ると、太くて長い煙の棒が、まつしぐらに駆けてゐるやうでありました。

このトラック隊は、第一線へ歩兵部隊を乗せて行つて、今度は糧食や弾薬を積むために引きかへして來たのでありました。

後に聞えてゐたはげしい銃聲が、いつの間にやら聞えなくなり、腹の中までもとゞろい

てゐた大砲の重い音が、だん／＼かすかになつたところをみると、もう第一線から十軒以上も離れて来たやうです。このあたりまでくると、道路上にポツ／＼支那人の群が見うけられました。

農具を牛に背負はせて引き、自分も大きい荷物を背負つた者、一輪きりの車に家財道具を乗せておしてゐる者、ブウ／＼と破れラツパのやうに豚をなかせつゝ追ひたててゐる者、父親の着物のはじをつかんで歩きつゝ、よそ見をしたといつて叱られてゐる少年、赤ん坊を抱いて、家鴨のやうな恰好で歩いてゐる女。かういふきたならしい群を、トラツク隊が追ひこすと、まひあがる黄塵が、彼等をたちまちひつくるんでしまひます。支那人の群はまるで泥水をかき廻されたおたまじやくしのやうに、埃の中によろけたり見えがくれしたりしながら、それでも口々に、「バンザイ、バンザイ。」といつて、手をふりました。

「バンザイ／＼は、なか／＼ふるつてゐる。どこで覺えたか知らないが、あゝして我々の御機嫌をとるところは、なか／＼かはいゝではないか。」

「しかし、敵國の軍隊の前へ、のこ／＼歸つてくるところなんかは、なか／＼横着だよ。」

「いや、さうではないよ。いくら支那人でも、敵の軍隊を恐れぬわけはない。彼等は、みんな土地をかはいがつてゐる百姓だからだ。みたまへ、彼等の麥が、もうあなんにのびてゐる。」

さう言はれてみると、あたりの畠は一面に青々としてをりました。

「なるほど、歸つてくるはずだ。かはいゝ、麥のことが氣にかゝつてたまらぬだらうからね。」

「西山はさすがに考へ方がちがつてゐる。君はたしかに、うちは農業をやつてゐるね。」

吉村隊長は、さも感じいつたやうに、西山上等兵をかへりみました。一番先頭の乗用車に、隊長と四五人の指揮班を乗せて、ハンドルをとつてゐた上等兵は、

「隊長殿からほめられると、どうも恐縮ですが、私のうちは自動車が商賣ですから、農業のの字も知りません。」

「しかし、「みたまへ、あんなに麥がのびてゐる」といふあたりは、農家の人でないといふ言葉だよ。」

西山上等兵は、片手で頭をかいて、

「これは白状しないわけには、いかなくなりました。あんなにいばつたもの言ひをして實は、あれは何かの本に書いてあつた文句のうけ賣です。隊長殿のやうなまじめな方に出合ふとかなひません。」

と、いつて笑ひました。

「なんだ、うけ賣か、あまりもつともらしく言ふので、うつかり感心してしまつた。」

「それなら白状するのではなかつたな。」

「こいつ、するいぞ〜。」

と、みんなも大笑ひしました。

「だが、われ〜は、かうして支那兵とは戦つてゐるものの、あのかはいさうな百姓たちのことは、別にして考へてやらねばならないね。」

吉村隊長は、眞剣な顔つきで言ひました。

二

「晝食のため、休憩。」

まもなく、かういふ命令が出ました。

トラック隊は、とある部落へとまつて、晝食にかゝりました。

その附近には途中で見かけたやうな百姓の一群が、わい〜がや〜しやべりながら休んでゐました。

ブリキ罐へ水を汲んで来て、お茶をわかさうとしてゐると、目ざとくそれを見つけた支那人が、焚きものをどつさりもつて来てくれました。

「謝々(ありがたう〜)、備(お前)なか〜氣がきいてるぞ。」

兵隊は、お禮を言ふと、彼等は、

「どういたしました。……。私どもは、とても日本兵隊さんが好きです。こんなことをしてあげただけでも、よろこんで下さいますからね。」

と、とろけるやうな笑顔おがまをしました。

「いや、さう言はれると恐縮きょうしゆくだ、おかげでお茶がわいたよ。謝々しゃく。」

と、言つてやると、彼等はペコ〜と、おじぎをして、

「もつたないことです。それなら、どうか、私どもの島はたけを荒あさないで下さい。」

と、口々にたのみました。

「いゝとも〜。おまへたちの島を荒すやうなことはけつしてしない。支那軍がこはした道でも、われ〜はそれをなほして通る。島の中へ車を入れるやうなことは絶対ぜつたいにやらないよ。」

と、言つてやると、彼等は「謝々。」と大よろこびで、なほ、このことを大人おとな（隊長）から約束やうそくしてもらへると、一そう安心ですがと、いかにも言ひにくさうに申し出ました。

「よし〜、隊長にそのことを願ひしてやらう。」

兵隊は、彼等を隊長のところへつれて行きました。

兵隊の話を、笑ひながら聞いてゐた隊長は、



母目三郎の

「よろしい。お前たちのめいわくするやうなことは決してしない。安心するがよい。でもまだ氣にかゝるなら、念のためお前たちの大人に約束してやらう。どうだこゝに大人があるか。」

と、言ふと、彼等は地面にふし、コト／＼と額を土に叩きつけて、

「あそこにゐる大人が、私たちの村長です。」と指さしました。

そこから百米もはなれた畠の畦に、白い髭をたらしした老人が、のんきさうに坐つて、太い煙管ですばり／＼と煙草をくゆらしてをりました。

「なるほど、あれなら大人らしいね。大人といふよりも仙人を畦に坐らせた恰好だ。」と、兵隊がをかしがりました。

「それにしても、村長ともあらうものが、すこしのんきすぎるな。まつ先に來てたのまねばならぬはすだがね。」

吉村隊長はいぶかしげにつぶやきました。百姓たちはあわてて手をふり、

「いや／＼、あれはとてもよい村長です。そんなにうちやらかしてはいけません。日本の大人、あれを見て下さい。村長はいまおたのしみの最中です。」

と、彼等の村長のために辯解しました。さう言はれて見ると、村長の前には雲雀の籠がすゑてありました。彼等の説明によると、あの村長はとても雲雀をかはいがつてゐて、戦争に追はれて逃げる時でも決して離したためしがない。かういふよい天氣になると、あゝして雲雀をあがらせて、その聲を聞くのが何よりのたのしみです。あのおたのしみが始ると、村長はすつかり夢中で、目も見えず耳も聞えない。それだからけつして日本の大人を軽んじたのではないから、怒らないで下さいと言ふのです。

「やつぱり支那は大きいな。戦争に追はれるさい中でもあれだから……」

さすがの隊長も、あきれたり、感心したりして、思はず空を仰ぎました。

すべてのものをはぐくみ育てる太陽の光が、空いつばいに満ちあふれてゐて、おしやべり屋の雲雀の聲は、光と共に地面へふりそゞいでをりました。その聲をたよつて行くと、空のすつと高いところに、針の先ほどの黒い粒が、ゆるやかに舞ひながら太陽を目がけて

のぼつてをりました。

隊長も兵隊も、しばらくは戦場にある身をわすれたかのやうに、うつとりとして見上げてをりました。その間に百姓の一人は、村長のところへ行つて、何かしきりにまくしたてました。村長はやをら立上つて、籠のヒゴをカラ〜とかきならしました。すると雲雀の聲は、びつたりと止んで、黒い粒は石ころのやうな勢で畠へ落ちて來ました。かと思ふと、もう籠の中へちやんとをさまつてをりました。

三

村長は、溢紙のやうに赤茶けたしわを満面にきざみ、白い髭を春風になぶらせながらやつて來ました。

隊長が、先ほど百姓たちにした約束をくりかへして申し渡すと彼は非常によろこんで、「それはありがたいことです。その代り私たちも日本軍のために、いろ〜とお手助をいたします。匪賊が道をこはしておこまりのやうな場合は、すぐにお知らせ下さい。お手傳ひ

にあがります。」

「さうか。それはありがたい。支那の人たちに、我々の心もちが少しでもわかつてもらへて、大へん愉快である。どうだ、これから我々は空車でかへるところだが、君等の村が道筋にあるのなら、ついでに乗せて歸つてもよいぞ。」

この思ひがけない隊長の言葉は村長を一そうよろこばせました。彼は「大いによろしい。」と、何度もおじぎをしながら、自分の村は五里店といつて、この道路上とは少し方角がちがふのであるが、そんなことはどうでもよい。途中までは是非乗せてもらひたい。百姓どもは、自動車に乗るといふやうなことは夢にも思つたことはないが、情の深い日本軍のおかげで、はからずも一生に一度のせいたくが出来る。どうかおねがひいたします。お禮には豚でも鶏でも、お望みのものを差上げるといふよろこびかたです。

村長にもましてよろこんだのは百姓たちです。今まであまり見かけたこともない自動車に乗るのだと聞いて、目の色をかへて騒ぎ出しました。乗りおくれは大へんといふので、先をあらそつてひしめきたち、荷物を忘れて乗つて悲鳴をあげるやら、いやがる豚を

むりにかつきこんで、ブウ〜ガア〜と鳴かせるやら、それはもうとても大騒が始まりました。

その騒をやうやくとりしづめ、みんなが落ちつくのを待つて、トラック隊は出發しました。彼等は早い速力に目を圓くして驚き、がや〜としやべりちらしたり、大得意になつて立ちこめる黄塵の中に手をあげたりしてよろこびました。

「かはい、者どもだね。みんな子供のやうにはしやいでゐるではないか。」

隊長は、すこぶる満足さうに、にこ〜しました。

「しかし隊長殿、やかましいのには閉口しますね。まるで鶯鳥と家鴨と豚を乗せてゐるやうです。もつとも豚は本物もゐますがね。」

「ハ、……。西山はうまいたとへをする。それも何かの本で讀んだのだね。」

「いや、一々あれを言はれてはたまりません。」

西山上等兵は、手をあげて頭をかかうとした途端、はつと驚いて、いきなり急停車をしました。

「あぶない。隊長殿、急停車です。」

「急停車。」

吉村隊長は、扉をあげて飛出すやいなや、大聲をあげて號令しました。

「停車。」「停車。」「停車。」

非常の警報は、まるで番號をかけるやうに後へ傳はつていつて、隊はたゞ一つの追突もなくびたりと止りました。

先頭の乗用車の前には、幅三米深さ二米もある壕が、二重三重に掘つてあつて、自動車を食ひとめる仕かけがしてありました。しかも、このあたりの道は畠より五十糎も低くなつてゐて、すぐには左右の畠へ乗りあげることが困難であります。かうした所へしかけがしてあるとすれば、これはたしかに匪賊の仕業であり、何處かこのあたりに待ちかまへてゐるにちがひありません。

「戦闘準備。」

隊長の勇ましい號令で、兵隊はバラ〜と飛びおりて道の兩側に散開しました。そのと

たんに左右の島から、激しく弾丸が飛んで来ました。

「うわあ。」

トラックの上の百姓たちはきもをつぶし、ころがるやうにして飛びおり、あわてふためいて逃げまはりました。

「さわぐなく。じつとして車の下にかくれてをれ。大丈夫だ、匪賊はすぐに追拂つてやる。」

隊長は、聲をからして静めようとしたが、相手が支那人だから手のつけやうがありません。子供の手をひつばつてはひ出す者、荷物を背負つてへたばりこむ者、かけ出す豚を追つてひつばたく者、男のわめき聲、女子供の泣聲、そして豚のうなり聲と、何も彼もごちや／＼になつてひつくりかへるやうな騒動になりました。

今の今までは、雲雀の聲がのどかにたゞよひ、なごやかな光にみちてゐた空を、はげしい銃聲がひつかきまはしました。うら／＼とかげろふのもえてゐた麥島には、ひつきりなしに弾丸が飛び交ひ、土煙と共に、青い葉をちぎつて吹き飛ばしました。

四

日本軍に正面からぶつかつては、とても勝みのないことを知てゐる匪賊は、ゲリラ戦術といふやり方で、いためつけようとした。ゲリラ戦術といふのは、歩兵とか騎兵とか砲兵とかいふやうな、戦闘力の強い部隊をさけて、その後から弾薬や糧食をはこぶその持物を奪ひとつて、軍隊の生命線といふべき、前後のつながりをたちきらうとするやり方です。しかしそんなことは覺悟の前の部隊は、少しも驚きません。最初のうちは乗せてゐた百姓たちの騒動で少々迷惑しましたが、この連中があわてふためいて逃げちつたあとは、いつものやうに落ちついて應戦しました。

敵は、弱いと見こんでかゝつたトラック隊が、意外に強いのですから、「これはかなはぬ。」と、早くも逃腰になりました。その證據には今まで盛んにトラックにあたつてゐた弾丸が、次第に少くなつて来ました。

吉村隊長は、



181



182

182

「そら、おきまりの逃支度を始めた。この機をはづすな。突撃々々。」

と、勇ましく軍刀をふりかぶつて、まつ先に突進しました。それにつづいて銃剣の切先をそろへた兵隊が、

「うわあ。」

と、ときの聲をあげて敵の壕へ飛びこんで行きました。敵にとつて日本軍の突撃ほどおそろしいものではありません。このものすごい「うわあ。」をくらつたものですから、何も彼もうちすてて、蜘蛛の子を散らすやうに、ちり／＼に逃げて行きました。

「状況をはり。そのま／＼、もう追はなくてよろしい。」

隊長は、演習の時よりものんきな號令をかけて、追撃する兵隊をとめました。こゝで戰闘をするのが目的ではありませんから、敵が逃げてさへしまへば、長追をする必要はありません。

「やれ／＼。手ごたへのない奴だな。たつたあれだけやつただけで、向かふの氣はすむだらうかしら。」

「なあに、鐵砲の音さへさせておけば、歸つて言ひわけが出来るといふわけだ。かはいさうなものさ、あんなまね事でもしなくては、俸給がもらへないのだからね。」

「一番かはいさうなのは百姓だよ。だいたいな島は荒され、家は焼かれ、その上自分の國の兵隊に弾丸までうちかけられるからね。」

「それだけでもうなれつ子になつてゐるから、逃げるコツを知つてゐるよ。あれだけの大混雑をしながら、一人も死んだ者もなく、荷物一つおいて行かないからね。」

さう言つてあたりを見廻すと、あれだけの百姓たちはどこへ行つたか、影もかたちも見えなくなつてゐました。

兵隊は、各自のトラックを検査して、故障の有無を報告し、つづいて引きかへすことになりました。

「乗車。」

隊長の號令で、一同はトラックに乗りこみました。

西山上等兵は、先頭の乗用車へ乗らうとして、運轉臺の扉をあけたとたん、思はずとんきやうな聲をあげました。

「や、これは大へんなものを忘れて行つたぞ。」

その聲に驚いた兵隊は、運轉臺をのぞきこみました。

「何だ〜。どうした。何を忘れて行つたのだ。」

五

そこには、生まれて三四箇月たつたばかりの赤ン坊が、すや〜と眠つてをりました。兵隊はあつけにとられて、赤ン坊を見ながら、しばらくは、

「ふむう。」と考へこみました。

「なるほど、これは大へんなものを残して行つたものだ。しかし、どういふつもりで、こんなものをおいて行つたのだらう。」

「支那人のことだから、赤ン坊よりは、荷物の方が大切だと思つたからかもしれない。」

「いや、それはちがふ。」

西山上等兵は、不服らしく言ひました。

「いくら、支那人でも、子供のかはい、情にかはりはないが、何分あの混雑の中へ弾丸がピユウ〜飛んで来るから、あぶなくてつれて逃げられなかつたのだらう。それが本當の親心といふものだよ。」

「なるほどね、親心といふものは、そんなものかも知れない。さすがに西山はお父さんだけあつて、さつしがいゝよ。」

吉村隊長が感心してほめると、

「これだけはほんとのことですよ。私のやうに子供に死なれたことのある者には、親の心もちといふものが、人一倍深く感じられるのです。この子の母親は、安否をきづかつて、どんなにか心配してゐることでせう。」

出征後、女の子をなくした西山上等兵の聲は、しんみりとしてきました。

「その母親が、どこへ逃げたかさつぱりわからないし、このまゝ捨てては行かれないし、

こいつは困ったことになったものだ。」

「さうだ。こんなめいわくな忘れものは、いくら廣い支那にも、たくさんあるまいね。」
と、すつかりもてあましてしまひました。

するうちに、赤ン坊はふと目をさまし、顔一ぱいしわくちやにして、いかにも悲しげに泣き出しました。これはます／＼弱つたことになつたと、當惑して顔を見合はせてゐる中で、赤ン坊の聲は一そうはげしくなりました。赤ン坊にしてみれば、これくらゐ泣くと、大ていお乳をふくませてもらへるつもりなのに、今日は一向にきゝめがありません。大いに見當がはづれた赤ン坊は、かんしやくを起して、口で泣くといふより、全身でわめき始めました。

「これは、お中がすいた泣聲ですよ。」

西山上等兵はさう説明しながら、「よし／＼」と赤ン坊を抱きあげました。赤ン坊は、やつとお乳にありつけたとでも思つたのか、現金にほつちりと泣きやめました。いつまで待つてもそのかひがないので、再び泣き出しました。

「そうら又始つた。いくらほしがつても乳があるわけはなし、こまつたな。こら／＼赤ン坊。バア、バア、バア。」

西山上等兵は、ありつたけの顔をしてあやしましたが、こんな赤ン坊がうけつけるはずがありません。

「そんな百面相をして見せてもだめだよ。ねん／＼ころりを歌つてやれよ。」

「馬鹿言ふな。支那の子供に、日本のねん／＼ころりがわかるものか。」

「あ、さうか。しかし泣聲はよくにてゐるから、案外、通用するかも知れないぞ。」

「そんな冗談はやめて、少しは本氣になつて考へてくれよ。弱つたな。こんなに泣かれるとかなはないな。匪賊の弾丸なんかよりもつと厄介だよ。何かだませる法はないかな。」
その時、ふと思ひついた一人の兵隊が、乾パンを出して来て、

「こんなものではどうだらうね。よくかんでふくませたら、ミルクの代用くらゐにはなるかも知れぬ。」

と、西山上等兵へ渡しました。

「これ〜。これはよいことに気がついた。何よりの御馳走だ。」
上等兵はよろこんで、前歯でコリ〜とかみくだいて糊のやうになつたのを、「アン。」と、口うつしにたべさせようとした。見てゐた兵隊もつりこまれて、「アン。」と口をあけました。しかし、これは少々気がひけると見えて、指へつけて赤ン坊の口もとへもつていきました。

六

顔中を口にしてわめいてゐる赤ン坊は、始めのうちなか〜うけつけませんでした。やがて味がわかつたと見え、チュウ〜と音をさせてしやぶり始めました。舌を指に巻きつけるやうにして、吸ひこみ〜するその力の強さと眞剣さ。上等兵はこの赤ン坊の何處にこんな力があるのかと思ひ、驚きの目を睜りました。

これは全く生きようとする者の眞剣な努力であります。この戦争の中に生まれ、生みの親にはおいてきぼりにされ、敵國の兵隊のふところに抱かれてゐる無心な幼子も、やはり

生きようとし、大きくならうとする不思議な強い力をもつてをりました。この眞實な力が西山上等兵をひどく感動させました。

「隊長殿、西山は、何だかこの子がかはいくなりました。この子を母親に渡すまでは、なんとかして育ててやりたいと思ひます。」

目をうるませて言ふ上等兵の熱心に、

「うん、それがよからう。今、この子は何も知らないが、大きくなつた時、日本の兵隊の指を吸うて育つたことを、きつと思ひ出すであらう。日本と支那との本當の親善といふことや、東洋の永遠の平和といふことは、かうしたところから生まれてくるのだよ。」

吉村隊長も心をうたれて言ひました。

さうして、この子の親は、村長の言つた五里店の者にちがひないから、探がすのにさうむつかしいことはない。又、これから引返して兵站地へ行けば、そこにはミルクだつて着物だつて、いくらでもあるから、育てるのに大した苦勞はないわけである。その上仕合せなことは、我々がトラック隊といふことである。どこへつれて行くにも少しも厄介にならない

し、乳母車うぼくるまのつもりで乗せたらよいではないかといふので、親が見つかるまで育ててやることになりました。

おなががくちくなつた赤ン坊は、ヒツク〜と、かはい、シヤツクリをつづけながら、一心に上等兵の胸ボタンを見つめてをりました。

「ほうら、もうこの通り上機嫌じやうけんだよ。かういふところを見ると、日本の子供とちつともちがはないぞ。」

「もう物が目につくらしいね。」

「こら〜、赤ン坊。今からお父さんがたくさん出来たぞ。お父さんたちはなか〜いそがしいから、さつきのやうに泣くと、こはいメンメだぞ。」

兵隊は、かはる〜る赤ン坊をのぞきました。

「しかし、赤ン坊〜ではかはいさうだな。何とか名をつけてやらねばなるまい。隊長殿、何かいゝ名をつけてやつて下さい。」

隊長も、心たのしく、自分の子に名をつけるやうな氣持きもちになつて、あれでもないこれで

もないと、考へてをりましたが、

「ハナコといふのはどうだ。」

と、いふことになり、日本流りゆうのりつばな名がつきました。

「あゝ、いゝ名をもらつたね。ハナコ、こつちのお父さんにも来いよ。」

兵隊は、抱だきたがつて手を出しました。隊長も、

「御機嫌ごきげんのかはらぬうちに出發しゅつぱつだ。西山は運轉うんてんの仕事があるから、抱くわけにはいかん。どれ〜わしにかしてごらん。」

と、自分でも抱きたがりました。

「いけません。ごらんさい。おなががくちくなるとすぐにこれです。」

と、西山上等兵は情なさうな聲を出して、赤ン坊を體からはなしました。その手の間から、ポタ〜と清らかな雫しづくがしたゝつてをりました。

「うわあ、これはかなはん。ハナコが、オシツコをはしらせをつたぞ。」

「アハ、……。支那人の中で、日本の兵隊にオシツコをかけたのは、まづハナコが最初

だらうね。」

「西山の妙な顔を見てくれ。あんまり一人で占領したものだから、罰があたつた。これからもオシッコの始末は西山にかざるよ。」

兵隊は面白がつてはやしました。

「おい〜。ひどいことを言ふな。するいぞ〜。」

西山上等兵はぶつ〜こぼしながら、それでも別に腹もたゝないらしく、にこ〜してゐました。

「オシッコをかけられても、笑つてゐるところを見ると、西山は中々修養をつんでゐるね。」
隊長も笑ひながらひやかしました。

七

この作戦がをはつて、トラック隊が駐屯地へおちついてから、西山上等兵は、さつそく手紙を書きました。

正治、元氣であるか。お父さんはとても元氣だ。

この間から戦がいそがしくて、手紙を書くひまがなかつたが、やうやく一かたづきしたので、今日は、お前がびつくりすることを知らせる。

お父さんはね、大へんなものを拾つたよ。一番上に、あ、の字がつくものだが、正治にはわかるか。ハ、ハ、ハ、わからないだらう、それはね、赤ン坊だよ。赤ン坊を、お父さんの自動車へおいていつた者があるのだよ。

どうだびつくりしたか、お父さんたちもびつくりした。そしてかはいさうでたまらなかつたから、その赤ン坊をみんなで育ててやることにした。そしてハナコといふ名をつけてやつた。

ハナコはかはい、子だ。もうお父さんへオシッコをしかけた。生まれて四箇月くらゐしかならぬが、おなががくちくなると少しは笑ふ。ミルクをのませたり、オムツをかへたり戦争をしながら、なか〜いそがしいことだが、お父さんは、なくなつたフミ子と思つて、かはいがつてそだててやる。この子の親たちが見つかつて、大きくなつたハナコ

を返してやつたら、どんなによろこぶかと思ふと、お父さんたちはたのしい氣がするよ。

こゝで、正治に考へてもらはねばならぬことがある。それは日本に生まれた仕合せについてだ。支那の子供にはこんな幼い時から、こんな不仕合せな目にあうて育つ子がゐる。それを考へる時、日本の國の有難さがよくわかるはずだね。うんと勉強してこの國の御恩にむくいるりつばな人にならなくてはいけない。

それと同時に、かういふ支那の子供たちを、あはれみいたはつてやらねばならない。これが強い日本の情といふものだ。そして、それらの子供が大きくなつた時、そこに始めて日本と支那との平和がやつて来るのだよ。

では、今日はこれだけ。お母さんへもこのニュースを聞かせてあげなさい。それからハナコからもよろしくとのことだよ。

まもなく、正治君からの返事が届きました。

お父さん、お手紙ありがたう。御元氣で何よりです。お母さまも僕もとても元氣ですから、安心して下さい。

とびきりのニュースにはびつくりしました。お母さまに話すと、まあかはいさうに、でもお父さんたちが、よくしてあげられるからうれしいと言つて、涙をこぼされました。お父さん、どうかハナコをかはいがつて、育ててやつて下さい。お父さんがおつしやつたやうに、ハナコのやうな子が大きくなつたら、きつと僕等と仲よくして、日本も支那も仕合せになれるでせう。先生も、この間お父さんと同じやうなことをおつしやいました。

お母さまと僕と相談して、ハナコへよいものを送ります。お母さまがおつしやるには、これを支那のかはいさうな子供にあげたら、なくなつたフミ子もよろこぶだらう。又、これが少しでもお父さんの手助になつたら、なくなつたフミ子の孝行だとのこと。僕もさう思ひます。

どんなよい物がはいつてゐるか、お父さんあてて見て下さい。一番上にふといふ字がつかますよ。いくらお父さんがわからなくても、僕は教へてあげません。小包が届いてから見てください。お父さんは、きつとびつくりされるでせう。今日はこれでおしまひ。ハナコへよろしく言つて下さい。お母さまからもよろしく。

「やられた。すつかりかたきうちにあつたな。この勝負はお父さんの負だ。かしこいことを書いてをるわい。まて／＼一番上にふの字がつくとは何のことだらう。」

西山上等兵は、こみあげてくるうれしさに顔をほころばせて、ひとりごとを言ひました。そしていくら首をひねつても、ふの字が上につく物はわかりませんでした。

八

それから間もなく、小包が届きました。上等兵は胸をわくつかせてほどいて見ると、乾かすに都合よくつくつたたくさんなオムツと、もう一つりつばな振袖の着物が出てきまし

た。それはなくなつたフミ子が着てゐた着物でありました。

「上にふの字がつくといふのはこのことか。なるほどこれを着せてやつたらフミ子もよろこぶかも知れぬ。なくなつたフミ子が孝行してくれるわい。ハナコはいゝな、こんなにきれいなオベ、を送つてもらつて。ハナコうれしいか、こら、うれしいか。」

上等兵はさうつぶやきながら、振袖の上に涙をこぼしました。

しかし上等兵は、氣を取直して、ハナコに美しい振袖を着せて、

「どうだ見てくれ。ハナコがおめかしをしたぞ。」

と、仲間へ見せに行きました。

「ほう。これはすばらしいものを着てゐるな。氏神さまへ参る時の支度ではないか。」

「ハナコ、そんなりつばなオベ、を着て、オシッコをするなよ。」

兵隊は、手をうつてよろこびました。そして、こんないゝ着物をふだん着せておくのもつたいない。これはこの子の親にわたす時の晴衣にして、ふだんは支那服にしておくがよいといふことになりました。

九月にはいつて、大陸に秋風がたち、アカシヤの街路樹が黄ばみかけるころになるとハナコはすつと智慧づいて、ウマ／＼くらゐは言へるやうになりました。あやしてやるとみづ／＼しい頬にほつちりゑくぼをつくつて笑ひました。そのあどけない笑顔の中に、清らかな齒が二枚あらはれたりすると、これが支那の子とはどうしても思はれなくなり、用事の無い兵隊は、ハナコ／＼と、奪ひあつてお守をしました。

しかし、兵隊は赤ン坊のお守ばかりしてはをれません。やがて次の戦闘が始まりました。

この前、ハナコをひろつた時の大討伐戦で、敵は大打撃をうけて散つたのですが、性こりもなく又集つて来て、良民をおどかしたりだましたりして手なづけ、皇軍にはむかうやうになりました。良民をだまして手先につかふのは、共産軍が一ばんとくいな戦法で、これくらゐやりにくい戦闘はありません。相手かまはずやつつけて良民をいためてはいけません。これは良民だと思つてうつかかりしてゐると、とんでもない目にあはぬとは限りません。こんどの討伐戦にも、この點については、特別に注意するやうにといふ命令でありました。

した。

吉村トラック隊は、前の時と同じやうに、部隊や、糧食などの輸送を命せられて、いさましく出動しました。今度は、あの五里店といふ村を通ることがあるかも知れないといふので、西山上等兵はその用意をして出かけました。

トラック隊は、あひかはらず灰のやうな土埃をあびて、一線部隊へはこぶ糧食を、山のやうにつんではしりました。この日は、トラックが意外な故障をおこしてひまどつたため、とある村へ行いた時には、日が暮れかゝつてきました。

夕日は焼けたゞれたやうに赤く、今しも地平線のかなたへしづまうとしてをります。一日の仕事につかれた百姓たちは、三々五々の群になつて、わが家に向かひ、それを向かへる民家からは、夕餉の煙が、うす紫色に立ちのぼつて、いかにもゆつたりした平和なひとときです。ところがをかしいことには、隊のそばを通る百姓たちの目つきには、支那人特有の愛嬌がなく、何となくけはしさが感じられます。さう思ふとこの村は、なんとなく不気味な感じさへします。

「はてな、これは、何かあるな。うつかりこんなところへはとまれぬぞ。」

隊長は、はやくも心の中で警戒しました。そこで乗用車を先にやつて、道路偵察をさせました。といふのは地圖で見ると、この村の前方にはかなり大きな川が流れてゐて、そこには橋がかゝつてゐるはずであります。このあたりは始めて通るところで様子がわからぬ上に、こんな日暮になると、橋のやうなところが、一番危険です。この村のけはしい空気が察すると、その橋が無事かどうかもうたがはしいし、又、匪賊がまちふせてゐるかもわかりません。

隊長は、いろいろ思案しながら報告をまつてをりました。偵察に出してから三十分もたつから、もう歸つて來なくてはならない時刻です。こんなにひまどるわけではない。吉兼軍曹はどうしてゐるか、運轉していつた西山上等兵は何をしてゐるか、もう歸つて來さうなものだと、少し氣になつてきました。そこへ、いきなり、

ダ、ダ、ダ、ダ。

と、はげしい機銃の音が聞えてきました。それはたしにか橋の方角からであります。

夕日はまつたく沈んで、物かげにはもはや夕闇がこくなつてきました。偵察に行つた乗用車はなか／＼歸つて來ませんでした。

九

「歸つて來ました。隊長殿、歸つて來ました。」

暮れた地平線を、目がいたくなるくらゐ見はつてゐた歩哨が、聲をはずませて報告しました。偵察に行つてゐた乗用車はライトを消して、いつさんに歸つて來ました。隊長はよろこばしげに、

「御苦労々々。」

と、手づから車の扉をあけて、二人の部下を向かへました。中から出て來た吉兼軍曹と西山上等兵は、

「道路偵察の報告。」

と、さげんで手をあげました。

『小さい聲で言ってくれ。この村の土民は、油断が出来ないのだ。』

『は。どうもそのやうに感じられます。隊長殿、橋はありますが、土も板もはぎとつてあります。我々の通行をさまたげる計畫にちがひありません。』

吉兼軍曹は、ぐつと聲を落して報告しました。

『やつぱりさうか。どうも様子がおだやかでないと思つた。それでその橋は少々の修理では通れないのだね。』

『さうであります。隊が通過するためには、すくなくとも二日は修理にかゝります。』

『さうか。それはこまつた。折も折、一線部隊は糧食が缺乏して、我々の到着を待つてゐるのだ。』

隊長は腕をくんで、そつと息をつきました。

『そればかりではありません。むかふ岸には、兵力不明の敵が、機關銃をもつて、陣地をかためてをります。』

『さつきの銃聲は、それだつたね。どこにもけがはなかつたか。』

『車には二三發あたりでしたが、かすりきす一つうけません。ハナコもいたつて元氣で、ちつともこはがりません。』

西山上等兵は、かういふ危い場所でも、ハナコを乗せて行つてみました。

『ハ、ハ、ハ……』

隊長は、報告が脱線したので、をかしがりながら、

『ハナコが元氣なのはよいが、かういふことになる、ハナコに泣かれるよりはめんだうだからね。』

『ところが隊長殿。』

上等兵は、何か思ひついたことがあるらしく聲をはずませました。

『隊長殿も、もうお氣づきになつたかも知れませんが、この村が五里店らしいのです。向かふの村はづれにはさう書いてありました。』

『なに、こゝが五里店。』

『さうであります。まちがひないと思ひます。そこで、例の雲雀の村長をつれて來たら、

向かふでも我々を覚えてゐると思ひます。こゝで、ハナコの親がわかれば、すべてが都合よくいくかも知れません。』

『よろしい。よいことに気がついた、隊は今晚はこゝへ露營する、その後のことは、村長をつれて来た上できめよう。しかし彼等には、どのやうなたくらみがあるかも知れぬから、くれぐれも氣をつけることが肝要だ。』

隊長は、すぐ決心しました。

命令をうけた兵隊たちは手わけをして、雲雀の村長をさがしに、出かけました。

考へてみれば無氣味なことです。行手の橋はこはされてしまつたし、露營する村落の土民は少しも油断が出来ぬし、うつかりしてゐると、いつどんな危険にさらされるかも知れません。しかもトラック隊の任務は重くて、一時も早く一線へかけつけなくてはなりません。この隊にとつては、まったく容易ならぬ大難がもちあがつてきました。

十

しかし、隊長はおちつきはらつて、すぐそばの空屋に入り、そこを本部にきめました。西山上等兵やその他の當番兵は、焚きものをかきあつめて来て、土間の上に火をもやし、隊長の夕食を炊いたり、ハナコのミルクをあたゝめたりして、お母さんどころの仕事をつせとやり出しました。おなかをすかせたハナコは、まぢきれなくなつて足をばたつかせて泣き始めました。

『けむたくはあるし、子は泣くし、飯盒の中で飯はこげるし、やれ〜、お母さんといふものは、つらいものだな。』

上等兵はじようだんを言ひ〜、ハナコを背にく〜りつけて働きました。

かういふ切迫した中に、その様子が如何にもをかしいので、隊長もつい『クッ〜。』としのびわらひをしました。

そこへ兵隊が、雲雀の村長をつれて来ました。あのいう〜と煙草をくゆらして、雲雀の聲に聞きほれてゐた村長にもにあはず、なんだかおど〜と落ちつかない目つきをしてしきりにおじぎを始めました。

隊長はきげんよく立ちあがり

「やあ、大人、しばらくだつたね。」

と、言つて手をあげました。

「お、日本の大人でしたか。」

村長も、こちらを覚えてゐたとみえて、なつかしげに進みよらうとしましたが、急に**お**びえたやうに立ちすくみました。

「どうしたのだ。さうしてゐないで火によつたらどうだね。今晚は、こちらからちよつと相談したいことがあるのだ。」

「ありがたう。」

村長は、腰をかけようともせず、用心深さうにあたりを見廻しました。

「では大人にたづねるが、この村にはいつて見ると、なんとなくざわついてゐる。これには何かわけがあるのか、まづ、それから説明してもらひたいな。」

「……………」

「われ／＼が良民の味方であることは、誰よりも大人が一番よく知つてゐるはずである。

この春出あつた時、日本軍のためならどんな手傳でもするといふ約束だつたね。」

隊長はかう言つて、じつと村長に目をそゝぎました。村長は返答にこまつて、そろ／＼しりごみを始めました。

その時、上等兵の背中で、ハナコがまた泣き出しました。上等兵は、

「お、よし／＼泣くな。今におつばいをやるからな。いゝ子だ／＼。」
と、あやしました。

その聲を聞いた村長は、始めて気がついたらしく、ひよいと上等兵をふりかへりました。日本の兵隊の背中にくゝりつけられて、ひどくむづかつてゐるハナコを見た時、彼は目をまるくしておどろきました。

「日本の大人。」

彼は、やゝどもりながら、

「あれは、どうした子供でありますか。」

隊長は、につこり笑ひました。

「あれは、君たちの仲間がわすれて行つた子供だ。いつかは親にかへしてやる日があると思つて、あの時からすつと育ててゐる。」

「お、日本の大人。日本の軍隊は神様の軍隊です。あの子を助けて下さいましたか。多謝々々。」

村長は、いきなりはひつくばひ、額を勢よく地面にたゝきつけておじぎをしました。

「よろしい。どうやらわかつたやうだ。それにつけても、いろ／＼聞きたいことがある。そのおじぎだけはかんべんしてくれ。」

隊長は、少々もてあましてうながしましたが、よほど感動したらしい村長は、それどころではなく、

「どうして／＼。さうしてはをられません、この子が薬にならずに無事であるのを、一ときも早く親どもに見せてやらねばなりません。お、／＼この子は、薬にせられたのではありませんでしたか。だからこそ、日本軍にかぎつてそんなむごたらしいことはせぬと、あ

れほど言つて聞かせたのに、百姓どもの馬鹿が、ついだまされてしまつて。」

と、言ひわけがましいことを、くど／＼と申し立てました。

「薬。」

隊長も上等兵も、さつぱりわけがわからぬので首をひねりました。

村長は、言ふだけのことを言ふと、すぐに親をひつぱつて来ると一人合點して、いそいで出て行きました。

「仲々氣せはしい老人だな。あわてて行つてしまつたよ。しかしこれでハナコも、親子の對面が出来さうだよ。そら、あの振袖を着せる時が来たね。」

「では、さつそく着せてやつて、親どもをよろこばせてやりませう。」

隊長と上等兵は、顔を見あはせてにつこりしました。

十一

おいしいミルクの御馳走で、おなかがかくちくなつた上に、オムツをとりかへ振袖を着せ



大正十三年



てもらつて氣持がよくなつたハナコは、とてもものじやうきげんで、上等兵の髭面に話しかけました。も少し大きくなつてゐたら、きつと髭をいぢくるところでせう。

そこへ、母親の手をひつばつた村長が、五六人の百姓たちをつれて、どや／＼とはいつて來ました。

村長は、上等兵に抱かれたハナコを指さして、早口にべちや／＼しやべりました。母親はハナコを一目見るなり、

「この子です、この子です。この子はまあ、こんなに大きくなつて……」

と、手ばなしで泣きだしました。

上等兵は、

「ハナコ、これがお前のお母さんだぞ。さあ、ひさしぶりにだつこしてもらへ。」

と、母親の方へさしました。しかし上等兵になじんでゐるハナコは、ほんたうの母親とは知らず、いやがつてペソをかきました。それが又一そう村長を感激させました。

「お、／＼。日本の大人が、そんなにやさしくして下さつたのか。それに又、見たことも

ない美しい着物を着せてもらつて、お、／＼、全くお前は四百餘州一のしあはせ者だ。」

さう言つて村長は、あれは何といふ着物かとき、ました。

「これは日本の振袖といふ着物で、日本のお嬢さんが着るものだ。この兵隊さんのお嬢さんがなくなつたから、その代りと思つてこの子に着せてやつたのだ。」

隊長が説明をしてやると、村長を始め百姓たちは一そうありがたがつて、

「お、／＼、もつたない／＼。」

と、しきりにペコ／＼頭をさげました。ハナコをだいた母親は、「神様でも、これほどいつくしんでは下さるまい。」と、泣き／＼言ひました。

村長は、ふと思ひ出したやうに、

「お、／＼、見たか皆の者。これだからこそ、わしは最初から信用しなかつたのだ。子供の生膽をとつて、薬にするといふやうなでたらめを、まつさきに信用したのは誰だ。その者は前へ出てみる。」

「村長さん、それはむりです。まつさきにだまされたのは村長さんです。」

「こらく、黙らんか。大人に向かつて何を言ふか。」

「でも村長さんが、まつさきに。」

と、仲間同志で口げんくわを始めました。

隊長はそれをとめて、

「仲間同志でけんくわをしてはいけない。いつたいそれは何のことか、くはしく話してみるがよい。わしが仲裁してやる。」

と、たしなめました。

村長は、情ぶかい日本の大人だから、きつと許して下さると信じてお話ししますがと、言ひにくさうに前置をして、

「この前、せつかくの御親切でトラックに乗せてもらひましたが、途中であんなおそろしい目にあひ、ちり／＼になつてやうやく故郷へ歸つてまゐりました。ところがごぞんじのやうにあわてて赤ン坊をおいて来て、この母親がしきりにくやんで泣いてをります。私どもは日本軍だからけつして無茶なことはせられない。そのうちにはきつと返して下さると、

なぐさめてをりましたところへ、どこからともなく共産軍が入りこんで来まして、「それは日本軍がよくやることだ。親切ごかしにトラックへ乗せたのも、ほんとは、赤ン坊をねらつてやつたことだ、日本軍には負傷兵がたくさんゐるが、その命をとりとめるためには、赤ン坊の生贖がせひ必要なのだ。お前たちがとられた赤ン坊も、今頃は薬にせられてしまつたのだ。それだから、日本軍を信用するな。こんど日本軍がやつて来た時には、俺たちが力をかけて、赤ン坊のかたきをとつてやる」と言ひましたので、つい、實はその——いえ、いえ、私は始めからそんなことは、けつしてないと日本軍を信じてをりましたが、こゝにある百姓どもが、わい／＼さわぎ立てますので、つい、ちよつとその氣になつたばかりであります。それがどうでせう。今日このありがたい有様を實際にこの目で見まして、まつたく夢からさめた氣がいたします。おわびのしるしには、これからどんな御用でもつとめますし、御入用ならこゝにゐる百姓どもの首でもさしあげます。實はこやつ共がまつさきにわい／＼さわぎだしたのであります。」

と、とんでもないことまで言ひだしました。百姓たちは首をすくめて、「お助け下さい。」

御恩にきます。」と、めそ／＼泣きだしました。

「ハハハ、泣くことはない。日本軍はけつして亂暴なことはせぬから安心してくれ。しかし、この先の橋をこはしたのも、その共産軍の仕業だ。」

隊長は、いかめしい聲でたづねました。村長はおろ／＼しながら、

「はい、まことに申しわけないことですが、橋をおとしておけば日本軍はいやでもこゝへ露營する。お前たちはしらん顔をしてゐて、夜中になつたら火をつけて逃げたせ、それを合圖に征伐してやると、それは／＼きびしい申しつけでありました。」

「さうか、それでよくわかつた。しかし、お前たちはその言ひつけ通りやる氣ではあるまいな。」

「ど、ど、どういたしました。めつさうもない。」

村長は、あわてて手をふりながら、

「お情ふかい日本軍に向かつて、どうしてはむかふことが出来ませう。これから村の者どもを集めまして、日本軍のお手つだひをいたします。あの橋の川上の淺瀬から御案内いた

しますから、あなた方で共産軍を征伐して下さい。橋はすぐ私どもがかけてさしあげます。」と、申したてました。

隊長は、その顔に眞心があらはれてゐるのを見て、

「さうか、それではお前たちにたのみ。費用は望みどほりやるぞ。」と、ねんごろにたのみました。

「どういたしましたして、私どもはもう日本軍のお役に立つだけてうれしいのであります。こらく、はやくお禮を言はんか。」

村長は、ぼんやりしてゐる百姓たちをしかりつけて、共々におじぎをしました。

十二

夜ふけになつて、淺瀬を渡つた一隊は、こつそりと敵の後へまはつて行きました。

そんなこととは夢にも知らぬ敵は、もうぼつ／＼火の手があがる頃だと、前の方ばかりに氣をとられてをりました。

軍刀を抜きはなつた隊長は、まつさきに立つて、

「突つこめ。」

と叫んで敵の中へ突進しました。これにつづいた隊は、夜目にもきらめく銃剣をかまへ、
「シイーツ。」

と、日本軍獨特の聲のない夜襲法で、黒いつむじ風のやうに襲ひかかりました。

天からふつたか、地からわいたか、いきなり後から來た日本軍に、敵は戦ふ氣力もなく、
あわてふためいて逃げ出しました。こちらはその後にくつついてどこまでも追ひまくりま
した。

しかし、あまり追ひまくる必要はありませんでした。百米も行つたところには橋をこはし
たばかりの川があつて、敵兵はポトン／＼と次々におちこみました。いくらあわててゐて
も、水の中へはいつたら氣がつくらしく、「あ、しまった。」と、びつくりしてもがきまし
たが、ねつとりとした濁流ではどうにも仕方がなく、大部分はそのまま、おし流されてしまひ
ました。泳の上手な敵は、やつとのことで岸にはひ上らうとしましたが、そこには日本軍

の銃剣が光つてゐるので、銃剣で胸を刺通されるよりはこの方がましだと思つて、再びど
ろんこになつて流れて行きました。

一方、雲雀の村長は、百姓たちを總動員して、夜どほし作業にはげみました。日本軍の
あたゝかい情を、目の前に見た百姓たちはすつかり感激して、力かぎりはたらいいたので、
夜のあけきらぬうちに、どうにか渡れさうな橋が出来ました。

「日本の大人、大丈夫です。さあ、渡つて下さい。」

村長は、大いばりで言つてきました。

「ありがたう。ありがたう。」

隊長は心から禮を言ひました。

やがてトラック隊は、ごう／＼と曉の大氣をふるはせ、もう／＼と土埃をまき起して
前進し始めました。

村民は總出で見送りました、男も女も老人も子供も、手に／＼日の丸の小旗をうちふり
ました。それは急ごしらへの旗で、大きい丸小さい丸、いびつの丸三角の丸とさまざまにな